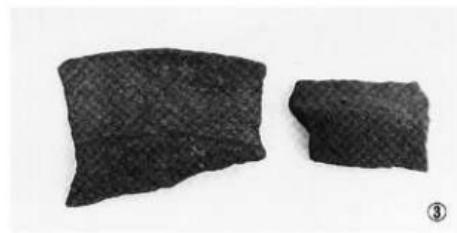


①



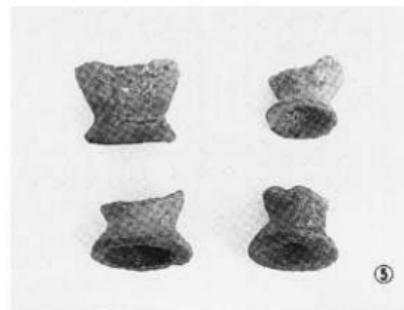
②



③



④



⑤

S-3区 出土土器

①～⑤ S D 02出土土器

仲 善 寺 遺 跡

例　　言

1. 本書は県道中村落合線自転車歩行者道新設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡は香川県大川郡大内町水主中村に所在する。
3. 調査は香川県土木部道路保全課より依頼を受け、香川県教育委員会が実施した。
4. 調査は文化行政課主任技師國木健司が担当した。
5. 本書挿図中のレベル高はすべて海拔、方位は真北を示す。また、挿図の一部に建設省国土地理院発行の25,000分の1の地形図「三本松」を使用した。
6. 発掘調査、整理作業を通じて香川県道路保全課、長尾土木事務所、鶴山西組、大内町教育委員会、財香川県埋蔵文化財調査センターその他関係者各位より多大なご協力、ご援助を得た。
7. 本書の執筆、編集は國木が行った。

目 次

第1章	調査に至る経過	1
第2章	調査の方法	2
第3章	立地と環境	4
第4章	調査の結果	6
第5章	まとめ	27

挿図目次

第1図 調査区配置図	3
第2図 周辺の遺跡地図	5
第3図 S-1~3区平・断面図	8
第4図 S区出土土器実測図	10
第5図 S-4区、N区南半部平・断面図	11
第6図 N区出土土器	12
第7図 N区北半部平・断面図	13
第8図 積穴住居及びN区出土土器	14
第9図 SH9202出土土器(2)	15
第10図 SH9202出土土器(3)	16
第11図 SH9202出土石器	17
第12図 第2次調査遺溝配置図	19
第13図 大溝群土層図	20
第14図 N区出土土器	22
第15図 S区出土土器(1)	24
第16図 S区出土土器(2)	25
第17図 S区出土土器(3)	26

図版目次

図版1-1 4年度S-1区全景	図版1-2 SH9201検出状況
図版2-1 4年度S-2、3区全景	図版2-2 4年度S-4区全景
図版3-1 4年度N区南半部	図版3-2 4年度N区SH9202
図版4-1 5年度N-1区全景(東から)	図版4-2 5年度N-1区全景(西から)
図版5-1 5年度N-2区全景(東から)	図版5-2 S区南端テラス上出土状況
図版6-1 5年度S区大溝群土層	図版6-2 5年度S区大溝群土層近景
図版7 4年度出土遺物	図版8 5年度出土土器

第1章 調査に至る経過

仲善寺遺跡はかつて家屋建設に伴って弥生土器が出土したことから周知の埋蔵文化財包蔵地として遺跡地図に登載され、「大内町史」でも紹介されている。現在その場所の所在は知れないが、今回の調査対象地北西の丘陵縁辺部あったと言われる。時期、出土状況についても明らかではない。また弥生土器出土地南側の小規模な谷筋を西方に遡った地区には現在もその伝承が残る仲善寺跡が所在している。

大内町内では平成元年度より平野部を中心に県営圃場整備が行われており県教育委員会はその都度分布・試掘調査を行って予定地内の埋蔵文化財の有無を確認してきた。平成4年度には仲善寺遺跡の北方及び東方の平野部が事業対象地となり、後者については対象地を南北に継続する県道中村落合線に自転車歩行車道を建設するため同路線を拡幅する工事も併せて行われることになった。そのため県教育委員会は大川土地改良事務所及び長尾土木事務所と協議を行い、両工事に先立って分布・試掘調査を行い埋蔵文化財の有無を確認すること、県道拡幅予定地の用地買収が未了であるため試掘は圃場整備予定地内で行い、県道部分についてはその結果をもとに協議を行うことで調整がまとまった。

県営圃場整備に伴う試掘調査は平成4年6月24日～6月26日に行った。事前の分布調査により埋蔵文化財の所在が予想された丘陵裾部微高部を中心に13か所のトレンチを設定した。この試掘調査ではかつて弥生土器が出土したと伝えられる丘陵北側の斜面部については厚い砂層、客土層が堆積しており埋蔵文化財の所在は確認されなかった。丘陵東方平野部についてはいずれも厚い砂層堆積が認められ遺物も若干量出土した。現県道周辺地域と東端の段丘上地域では特に遺物量も多くピット等の遺構も検出された。

この試掘調査結果によって地下遺構及び濃密な遺物包含層の存在が予想された現県道周辺の約2400m²について事前の保護措置が必要と判断されたため、直ちに土地改良課及び道路保全課と保存協議に入った。圃場整備事業については切土を包含層上面以上の高さに留めて現状保存を図ることとし、包含層に掘削が及ぶ小規模な水路部分についてのみ工事立会を行うことで調整がまとまった。工事立会は4年10月4日に行い弥生土器包含層の広がりを確認している。

道路保全課主体の自転車歩行者道新設部分については擁壁等掘削が深く及ぶこともあり事前調査を実施することとなった。圃場整備事業を並行して行われる事業であるため調査は耕作土を除去した時点で工事を中断して実施する必要があった。こうして9月21日から10月3日まで実働8日間の予定で事前調査を行うことになった。

以上の第1次調査は圃場整備事業と並行して行われる県道改良予定地部分を対象としていたが、この調査終了後遺跡はさらに南方に広がることが確実とみられた。県道改良事業は5年度

以降も南に向って継続して行われるためその対象地も事前調査が必要となった。地形等からみて遺跡範囲は現在与田川の段丘上に走っている県道水主三本松線付近まで広がるものと考えられたためこの部分（延長約100m、幅3～10m、面積500m²）については5年度工事着手前に事前調査を行うことにした。こうして5年7月19日～8月6日にかけ上記事業に伴う2次調査を実施した。

調査終了後整理作業に着手した。継続調査であるため両年度併せて報告書を作成することにした。整理作業に際しては渡部明夫、山元敏裕、山本英之、片桐孝浩、大久保徹也、森下英治、藏本晋司の諸氏から御指導、御助言をいただいた。記して厚く御礼申し上げます。

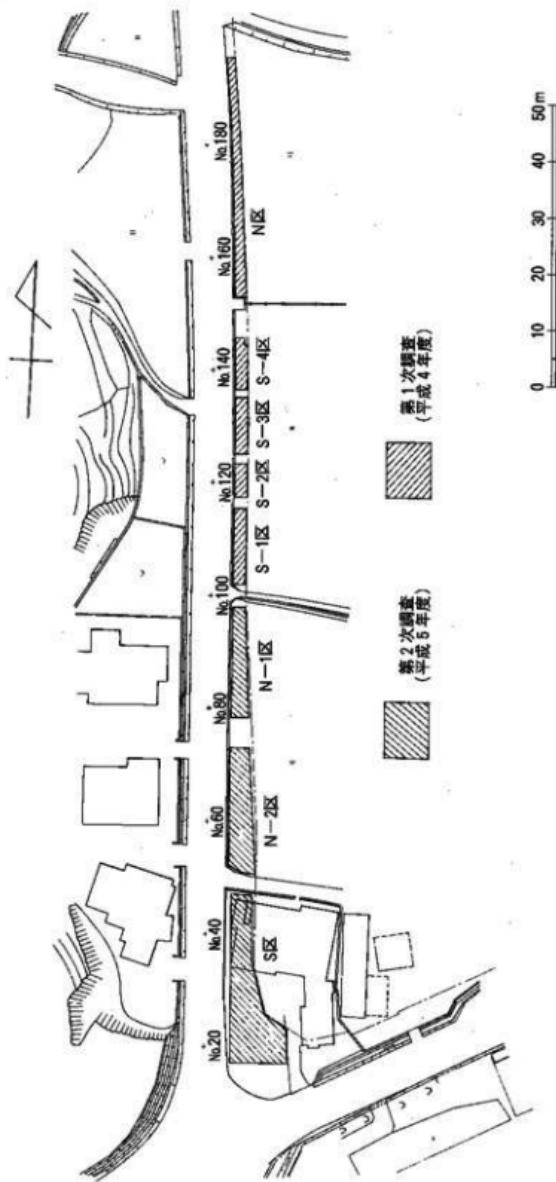
第2章 調査の方法

第1次調査は平成4年9月21日から10月1日まで行った。調査は延長約100m、幅約2mを対象とし、調査面積は約200m²である。現況地割に合わせて対象地を南区（S区）、北区（N区）の2つの調査区に大別し、S区はさらに4小区（南からS-1区、2区…4区と呼ぶ）に細分して調査を行った。N区は細分せず43mの調査区を一括して調査している。

調査はS-1区より着手した。S区は比較的多くの弥生土器包含層の存在が確認されたため、重機による掘削はその上面にまで留め、包含層発掘、遺構面精査、遺構発掘等は人力で行った。N区ではさらに上層で中世包含層、遺構等を確認したが、幅狭な調査区であること等からやむを得ず重機により断ち割り遺構内容等は断面観察による確認に留めざるを得なかった。いずれの調査区も南西隅を起点として記録を行っている。

第2次調査は平成5年7月19日から8月6日まで行った。やはり地割に合わせて北区（N区）、南区（S区）に調査区を大別し、N区はさらに2分して北半部をN-1区、南半部をN-2区として調査を行っている。記録化は現県道の中心点（No.20～No.100）を結ぶラインを基準線とし調査区北西隅部を調査区の起点としている。

第1図 調査区配置図



第3章 立地と環境

大内町は讃岐国の東端を占める旧大内郡にあり、南半部を山塊が占め北方を瀬戸内海に面している。町の東半部は南部山塊に源を発する与田川流域に沖積平野が広がっており、同中流域の段丘上あるいは低丘陵上を中心に数多くの遺跡の所在が知られている。

町内ではこれまで発掘調査が行われた例が極めて少なく詳細な遺跡の内容が判明しているものも少ない。縄文時代以前の遺跡については調査例がないが、与田川中流域の河原で有舌尖頭器、スクレイバー等の旧石器や環状石斧、石匙、石巒、独鉛石、石斧等の縄文時代石器類が採集されている。

弥生時代に入ると集落あるいは墳墓の所在を示す遺物出土地が与田川周辺の低丘陵を中心に数多く知られている。落合遺跡は前期新段階の土器や石器が多数出土したことで知られる。工事中の発見であったため遺構は確認されていないが、低丘陵縁辺部の地表下1～3mの黒色粘土中から遺物が出土している。また、与田川上流域の水主神社遺跡からは中期後半の、中流域の支流沿いに展開する飛谷遺跡からは後期前半の壺が出土している。

弥生時代後期～古墳時代前期にかけての時期になると低丘陵上及び与田川の段丘上にさらに多くの遺跡が所在している。水主神社遺跡、幸代池西遺跡、別所池田遺跡、風呂遺跡、飛谷遺跡等の集落遺跡と推定されるものはか、器台が発見された別所遺跡、壺棺等が発見された笠塚遺跡、高原遺跡、金毘羅山遺跡等の墳墓関係遺跡が知られている。断片的ではあるが町内の各所で開発が進んで生産力が増大し、次第に地域権力が集約化していく状況が伺える。

町東端の白鳥町境の丘陵上に所在する大日山古墳は全長38mをはかる県内では最東端に一する前方後円墳である。柄鏡形の前方部を有しており竪穴式石室中に石棺が埋納されている可能性が高いことから、前期後半から中期初頭の築造年代が与えられる。弥生時代後期から進んできた生産力の増大がこうした有力首領の出現を可能にしたのであろう。その他に築造時期が明確な古墳は横穴式石室を主体部とする原間古墳以外には知られていないが、与田川を見下ろす丘陵を中心小規模な古墳の所在が知られている。落合遺跡の北東に一する西村古墳は直径約20mと比較的大型のマウンドを持ち、海浜部の低地に立地している点が注目される。

仲善寺遺跡は与田川西岸の段丘上に形成された集落遺跡で先の集落遺跡群の中枢ともいえる位置に所在している。弥生時代中期末から古墳時代前期を中心として将来周辺の調査が進めば拠点集落としての位置付けが可能かもしれない。また、大日山古墳被葬者の勢力基盤の一つとみなすことは現段階でも可能と思われる。



- | | |
|-----------------|------------------|
| 1 仲善寺遺跡（今回調査） | 15 別所古墳 |
| 2 西内遺跡（縄文） | 16 別所池田遺跡（弥生～中世） |
| 3 水主神社遺跡（弥生～中世） | 17 高原遺跡（弥生） |
| 4 水主神社古墳 | 18 金毘羅山遺跡（弥生） |
| 5 大社遺跡（旧石器～弥生） | 19 杖ノ端山古墳（古墳） |
| 6 尾長山遺跡（古墳） | 20 与田寺山古墳 |
| 7 桶谷古墳（古墳） | 21 落合遺跡（弥生） |
| 8 北山遺跡（弥生～奈良） | 22 清瀬古墳 |
| 9 岩瀬庵古墳 | 23 西村古墳 |
| 10 風呂遺跡（弥生） | 24 原間 1号墳（横穴式石室） |
| 11 笠塚遺跡（弥生） | 25 幸代池西遺跡（弥生～中世） |
| 12 城ノ内遺跡（弥生～平安） | 26 原間 2号墳 |
| 13 飛谷遺跡（弥生） | 27 大日山古墳（前方後円墳） |
| 14 別所遺跡（弥生） | 28 仲善寺跡 |

第2図 周辺の遺跡地図

第4章 調査の結果

【I】、平成4年度の調査

(1)、基本層序と概況

基本層序は大きく7層に分けられる。最上層のⅠ層は耕作土、Ⅱ層は床土及び茶褐色砂層である。Ⅱ層中には遺物はほとんど包含されていない。Ⅲ層は暗灰褐色砂層あるいは暗褐色砂層で中世遺物を比較的多く包含している。S-1～3区は同層を欠いているが、S-4区以北では20～60cmの厚さで堆積している。特にN区南半部での形成が顕著である。同地域ではⅢ層直下を遺構面とする溝、ピット、焼土塊等の遺構を検出しており中世集落域の一端を検出したものとみなされる。また、S-3区以南で包含層が形成されていない点については削平によるものとも考えられるが、同時期の遺構がほとんど検出されていないことからすればむしろ中世集落域がS-4区以北に展開していたとみなすべきであろう。この地域は地形的には西方の小規模な谷筋が東に向って大きく開く位置にあり、谷筋最奥部に所在したと伝えられる仲善寺跡に関連する地域として位置付けることも可能であろう。

Ⅳ層は灰白色砂層あるいは茶褐色系の砂層で、全ての調査区に形成されている。前者は締まりの粗砂であり洪水、土砂崩れ等により瞬時に形成されたものと考えられる。量的にはさほど多くないが保存状態の良好な古式土器が出土している。時期的にはほぼ布留式中段階～新段階に位置付けられることから、同層が同時期以降の比較的近い時期に形成された可能性がある。ただ、同層直上が中世の遺構面として機能しており間層が認められなかったことからすればかなり新しい時期を想定すべきかもしれない。いずれにしても、仲善寺遺跡が古墳時代中期以降長期間廃絶していたとみなすことは可能であろう。

Ⅴ層は灰黒色粘質土である。Ⅵ層あるいはⅦ層上に5～20cm程度と一様の堆積状況を示している。Ⅵ層とほぼ同時期あるいは若干先行する時期と推定される古式土器が比較的多く含まれている。同層直下のⅦ層上面を遺構面とするピット群を検出しておりそれらの帰属時期を示すものと考えられる。Ⅶ層はS-1区南半部及びS-2、3区に堆積した灰褐色系の粘質土である。出土遺物が少ないため形成の時期は明確でないが、上下の土層からみて弥生時代後期段階に形成されたものと推定される。

Ⅷ層は地山直上に薄く堆積した暗灰色砂層で弥生時代中期末～後期初頭に位置付けられる土器、石器を包含する。調査対象地のほぼ全域を5～20cmの厚さで覆っており、同時期の集落遺

構が広範囲にわたって展開していたことを示している。同層上面は古墳時代前期の遺構面として機能しており、また同層直下からは竪穴住居、溝、ピット群等を検出している。

(2) S区の概要

現在は水田化され平坦地形となっているが、地山面は全体に南から北に向って緩やかに下る地区である。最高所に位置するS-1区南端での地山面のレベルは23.8m前後で、S-4区北端の23.0mとは80cmの比高差がある。ほぼ全域で弥生時代中期末～後期初頭あるいは古墳時代前期の遺構を検出している。以下、4小区毎に概要を記す。

(S-1区)

II層直下に洪水堆積層と考えられる灰白色粗砂層（IV層）が厚く堆積しており、中世包含層（III層）の形成はみられない。IV層中の遺物の包含は確認されていないが、他の調査区では布留式段階の土器が包含されている層である。V層の形成は認められなかったがVI層が南半部と北端付近に形成されている。VI層は調査区の北半部にみられる緩やかな落ちの部分に形成されているが、微高地となる南半部では欠いている。

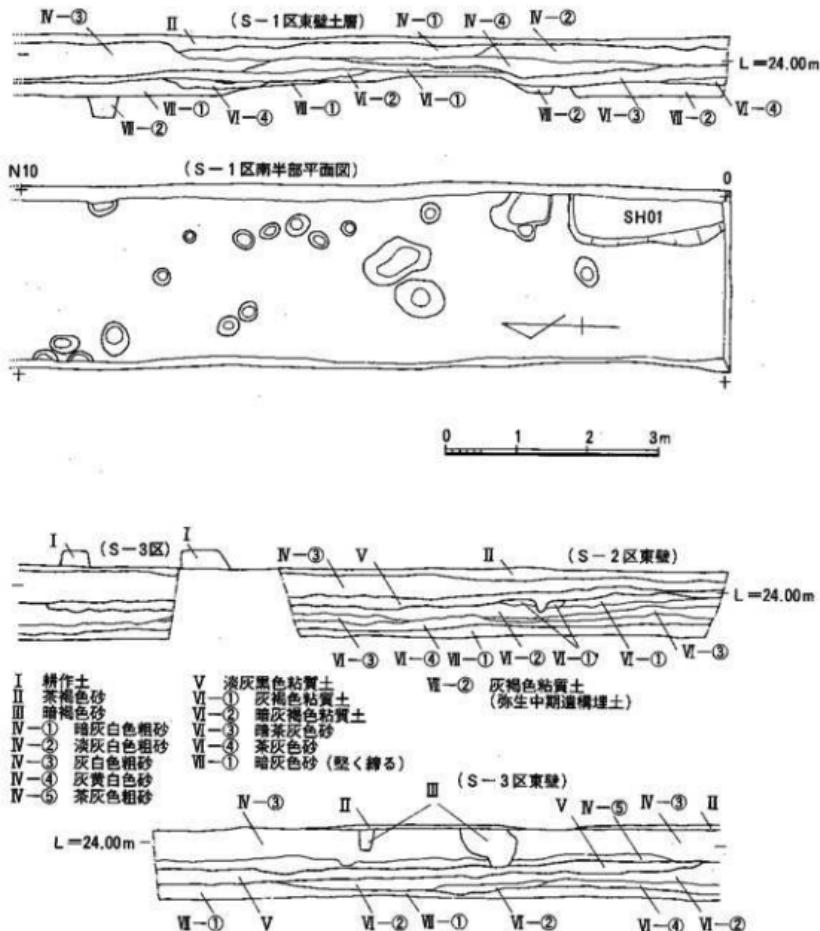
遺構は調査区南半部の微高地部分でまとまって検出している。竪穴住居1棟、土坑、ピット群等であるが、VI層を欠く位置であるため竪穴住居を除き帰属時期を明確にすることは困難である。落ちの部分ではVI層下でピット1を検出したのみであった。

竪穴住居（SH9201）は大半の部分が調査区外にあり西辺付近の一部を検出したに留まる。西辺と一部検出した北辺はいずれも直線的な掘り方をもち、北西隅部が弧状を呈することから隅丸方形の平面プランを持つ可能性が高い。主柱穴、壁溝は検出していないが、北西隅部付近に径約60cmの範囲で炭化物の広がりが認められたことから住居と考えた。床面はほぼ平坦で、壁面は垂直に近い掘り方をもつ。壁面の深さは約20cmである。

第8図1、2が同住居から出土した土器である。1は壺で口径21.3cmを測る。口縁端部を上方に拡張し外面に沈線状の凹線2条を施す。体部外面はハケ、内面はヨコナデ調整。灰白色を呈する。2は無頸壺で口径8.8cmを測る。本来脚台が付いていたものと思われる。算盤玉状の体部を持ち、口縁上端面と端部直下外面に退化した凹線を施す。後者の凹線上には2孔1対の穿孔がある。外面調整は体部上半部がタタキ後ハケ調整、上端付近はさらにナデ消し、下半部はヘラミガキである。赤灰色を呈する。以上の資料からはその時期を特定することが困難であるが、中期末あるいは若干後出する時期を考えておきたい。

第4図1、2は包含層出土土器である。1はVI層から出土した大型鉢で口径43、4cmを測る。口縁部は体部から緩く屈曲して外反し端面を持つ。内外面ともに粗いハケ調整を施すが外面は

ナデ消している。2はVI層から出土した底部で、粘土紐を貼り付けることにより上げ底気味の平底を形成している。外面調整はヨコハケ。



第3図 S-1～3区平・断面図

(S-2区)

全ての調査区のうち最も遺構、遺物が希薄な地区である。I区北半部と同様の土層堆積状況をみせるが、遺物出土量は少ない。V、VI層の境界にVI層が形成されている。出土土器が皆無であるため時期は明確でないがこの粘質土の堆積は弥生時代後期段階にも徐々に堆積が進行していたことを示していると思われる。

(S-3区)

土層序は2区と同様であるが北端付近はV層直下がVI層となりVI層の形成はみられなくなる。VI層直下の地山面はほぼ平坦であり、ピットを検出している。V層上面は南から北に向って緩やかに下るが、この落ちの部分はIV層の厚い堆積により中世段階には上面がほぼ水平になっている。III層の形成はみられないがIV層上面を遺構面とする中世のピット、土坑等を検出している。埋土はいずれも灰褐色砂である。

遺物は比較的多く出土しているが大半がIV層から出土しており時期的には布留式段階に下るものが多い。第4図3～5がIV層出土土器である。3は口径5.8cmを測る小型丸底鉢である。外面に指頭痕が残る。4はほぼ完形の高杯で口径15cm、器高13cm程度を測る。杯部の屈曲部位には痕跡的な段が残り、上半部は外反気味に開く。脚部は据部があまり開かず内面上端にシボリメを残すが中位以下には横方向のヘラケズリを施す。外面はハケ調整の後上半部をナデ消している。5は口径12.8cmを測る小型の甕で、扁平な球形の体部を持つ。口縁部は内湾気味で叩き出しにより形成している。端部は丸い。以上包含層からの出土であり一括資料とはみなしがたいが、概ね布留式古段階から中段階に併行する時期の所産と推定される。

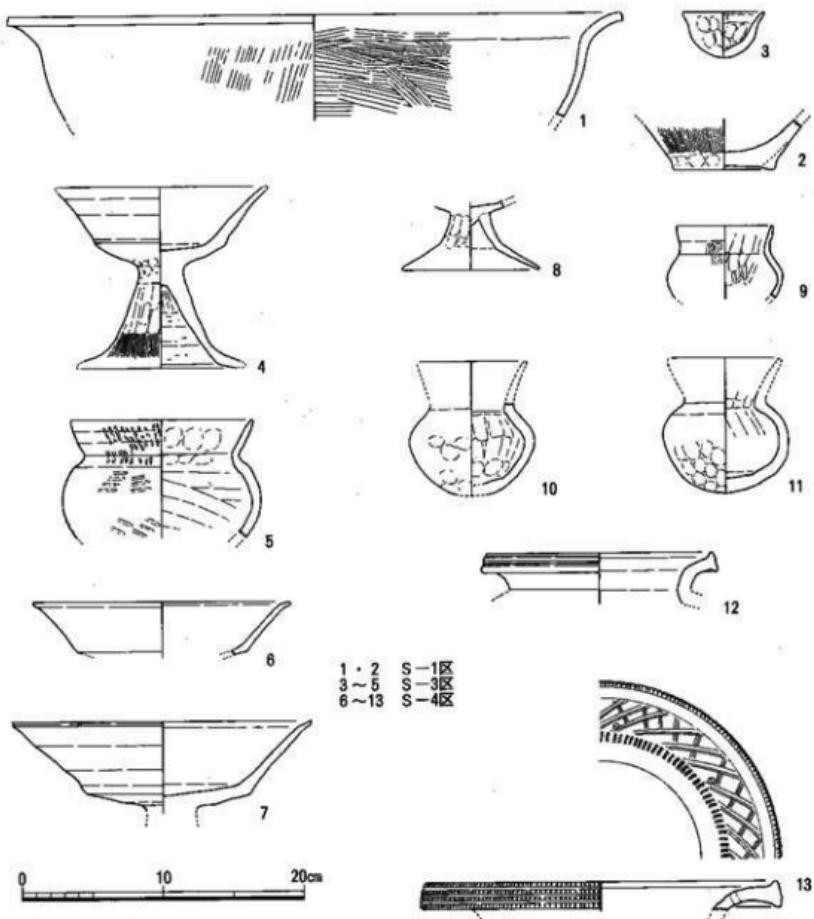
(S-4区)

比較的多くの遺構、遺物を検出した調査区である。やはりVI層の形成はない。遺構はVI層直下からピット群・土坑・溝、VII層上面からピット群、IV層上面から中世溝、土坑等を検出した。遺物量も多くV層中から古式土師器、VI層中から中期末に位置付けられる弥生土器が出土している。

地山直上で検出した土坑は径60～70cmの不整円形の平面プランを持ち、深さは64cmを測る。南に向って延びる幅40cm、深さ20cmの溝が取り付くが、相互関係・性格等は不明である。周囲のピット群が住居の主柱穴とすれば住居内の中央土坑と間仕切り溝であるのかもしれない。ピット群は大半が地山面での検出であるが配列等は明確でない。

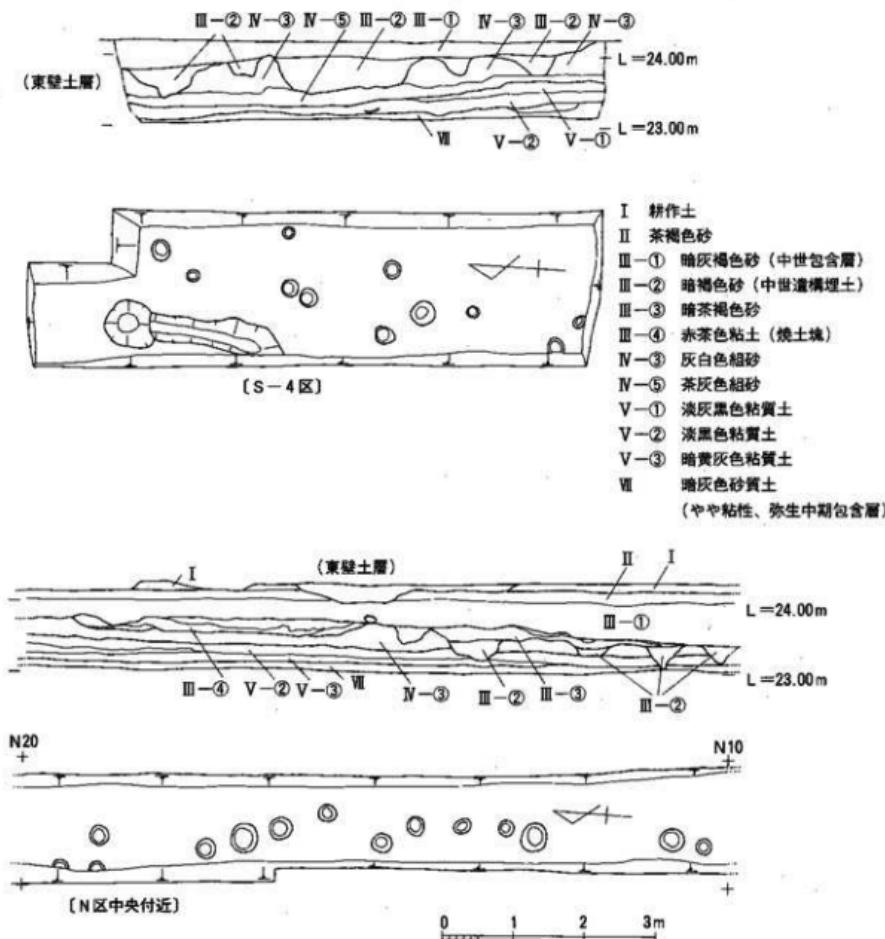
第4図6～13が当調査区出土土器である。6～11がV層、12・13がVI層からの出土である。6～8は高杯である。杯部は中位で明確な段を有し斜め外方に外反気味に延びるもので、口縁端部は内面をヨコナデすることによりわずかに外反させている。6は口径18.2cm、7は同20cmを測る。8はハの字に開く脚柱部から緩やかに屈曲して大きく開く裾部を持つ。9～11は小型丸底土器である。9は直立する口縁部を持ち体部は中位でやや強く屈曲する。体部上端から口

縁部にかけて外面はミガキ後ナデ調整を施す。焼成良好で器壁も薄い、やや精製された土器である。10、11は口縁部形状は不明であるが扁平な球形の体部を持つ。いずれも外面に指頭痕が残り器壁も厚い粗雑な作りである。



第4図 S区出土土器実測図

12は短い頸部から外反する短い口縁部を持つ壺で、端部は上下に拡張し端面に沈線状の凹線を3条廻らす。13は大きく開く口縁部を持つ壺あるいは器台で装飾豊かな土器である。上下に拡張した口縁部の端面に3条の凹線を廻らせ凸部にさらに刻み目を施す。口縁部内面は外側に3条からなる斜格子文と内側に細かく施された刺突文をもつ。両者の境界付近には穿孔がみられる。口径24.4cmを測り、焼成良好で暗茶色を呈する。



第5図 S-4区、N区南半部平・断面図

(3) N区の概況

延長43m、幅1.5~2mの調査区ほぼ全域で遺構、遺物を検出している。南半部はS-4区から引き続きⅦ層上面で中世の遺構を多く検出した。遺構ベース、遺構埋土とともに粗い砂であり遺構としての認知が困難であったため面的な確認ができなかつたが、断面観察により焼土塊・溝等の遺構を確認した。焼土塊は厚さ10cm程度の粘土が赤茶色に焼けていたもので、N15~19mの幅約4mの範囲で浅い皿状土坑を構成していた。埋土は灰黒色土で炭化物が認められたことから窯跡あるいは竈跡と推定される。第6図1は埋土中から出土した土器杯で口径12cm、器高3.4cmを測る。底部はヘラ切りされている。13世紀代の所産と推定される。その他Ⅱ、Ⅲ層からは須恵器甕、土器質土釜、土器杯（第6図2）等が出土している。

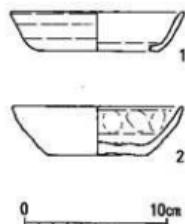
下層の遺構はⅦ層上面とⅧ層下の地山直上から検出している。上層からはピット群を検出したのみであるが、下層からは堅穴住居1棟、溝、ピット等を検出している。堅穴住居については後述する。

N層はN34以南で一様に堆積しており古式土器を多量に包含している。第8図3~7が同層出土土器である。3は口径14.6cmを測る甕で球形の体部と内湾気味に立ち上がる口縁部をもつ。叩き目を顯著に残し口縁部も叩き出しにより形成している。体部内面はヘラケズリでその範囲は口縁部の屈曲部にまで及ぶ。4、6は高杯で同一個体の可能性もある。杯部は明瞭な段を残し上半部は直立気味に長く立ち上がった後端部付近で大きく外反する。口径は16.8cmを測る。脚部はハの字に開く脚柱部から緩やかに大きく開く裾部をもつ。5は内傾する広口壺の頸部で内外面ともにハケ調整が顯著である。7は小型丸底鉢で口径8.4cmを測る。外面に指頭痕が残る。以上の土器のうち5の広口壺に古い様相が認められるが、他は布留式古段階~中段階に併行する時期の所産と推定される。

(S H9202)

N24~N28にかけての位置で検出した堅穴住居である。平面プラン、規模とともに明らかでないが、調査区内での幅は約4mを測る。壁面は垂直に近い掘り方を持ち、深さは約20cmである。底面からピット群を検出したことから住居跡と考えた。

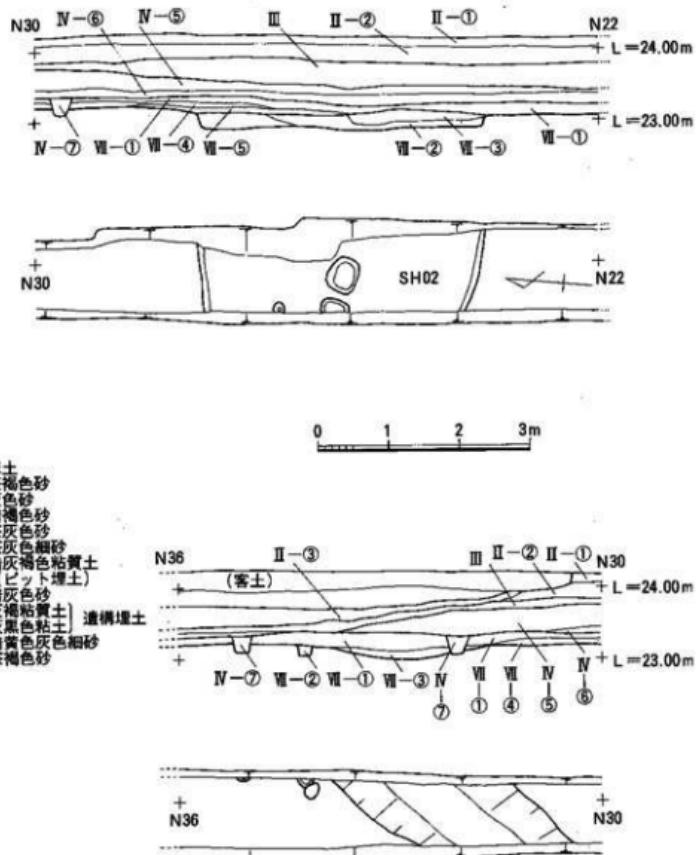
当住居は全体の3分の1程度を発掘したのみであるが出土遺物量はきわめて多くコンテナ約4箱に及ぶ。特に中央から以南の部分は土器溜り状を呈しており住居廃絶後廃棄坑として利用されていたものと思われる。確認当初は単に土器溜りとして調査を行ったため層位関係が明確にできなかつたのは遺憾であるが、ほとんどが暗灰褐色粘質土及び黒灰色粘土層から出土して



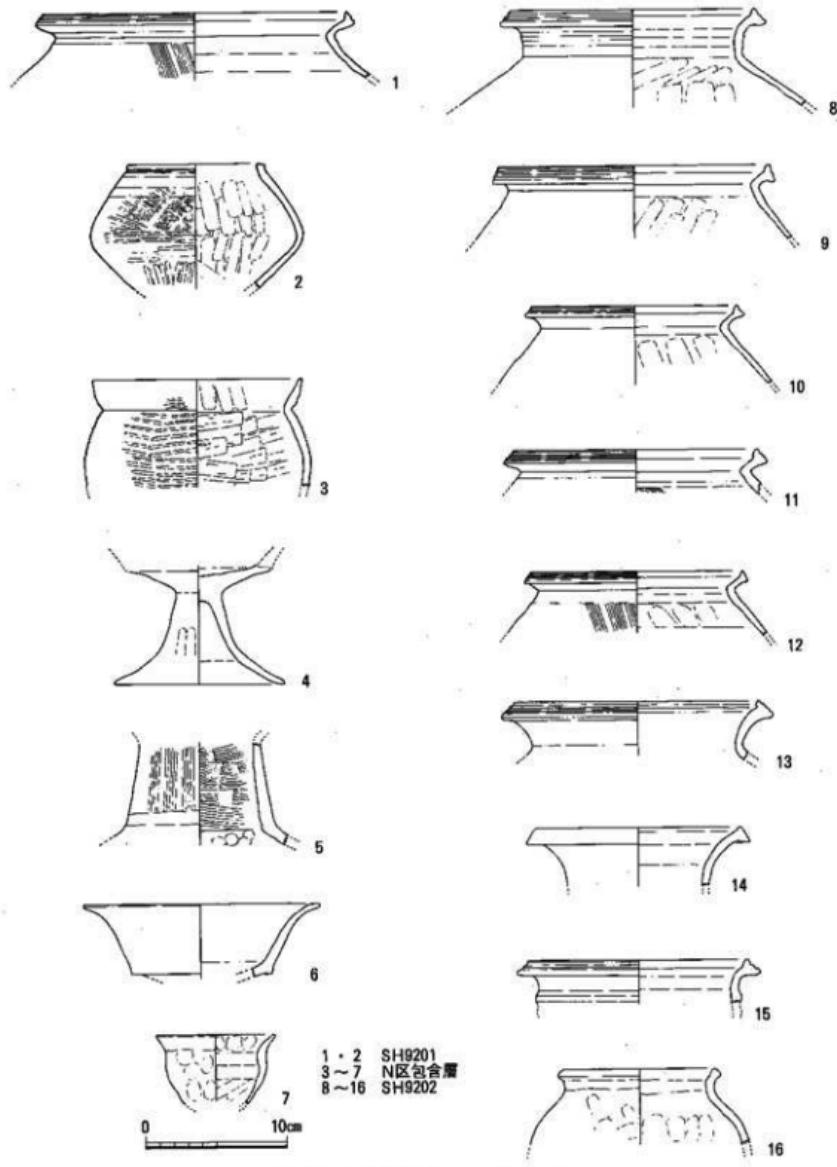
第6図 N区出土土器

いる。若干の時間幅を想定しておく必要があろうがほぼ一括資料とみなしてよからう。

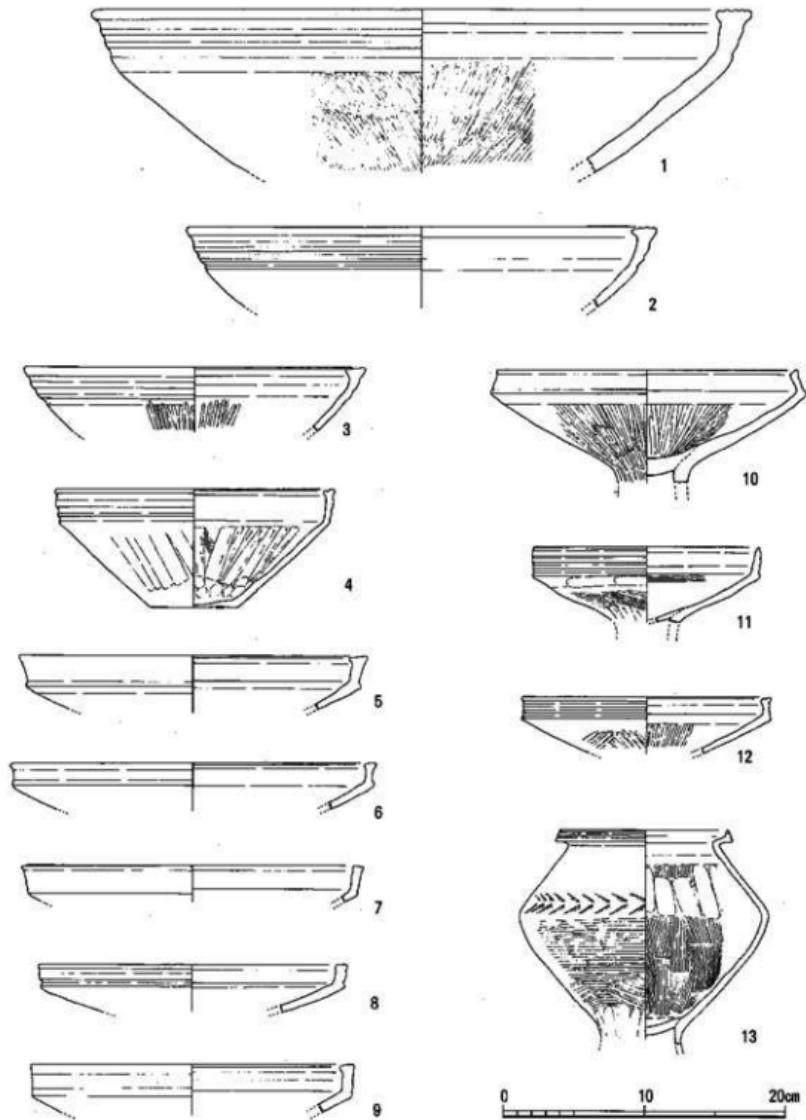
第8図8及び13~16は壺の口縁部である。8は直立する頸部から短く外傾する口縁部を持つ。端部は上下に拡張し端面に2状の凹線を持つ。また頸部にも2状の凹線を廻らせてている。13は緩く外反する口縁部の端部を主に上方に拡張し沈線状の凹線を3状廻らせている。内外面ともに丁寧なナデ調整を施す。14、15は長頸壺と思われる。14は端部を上下に拡張するが端部は平坦で凹線はみられない。15は頸部に凹線を持ち口縁部は短く外反する。端面には2状の凹線を持つ。16は短頸壺である。ナデ調整を行っているが粗雑な作りである。9~12は壺で口縁



第7図 N区北半部平・断面図



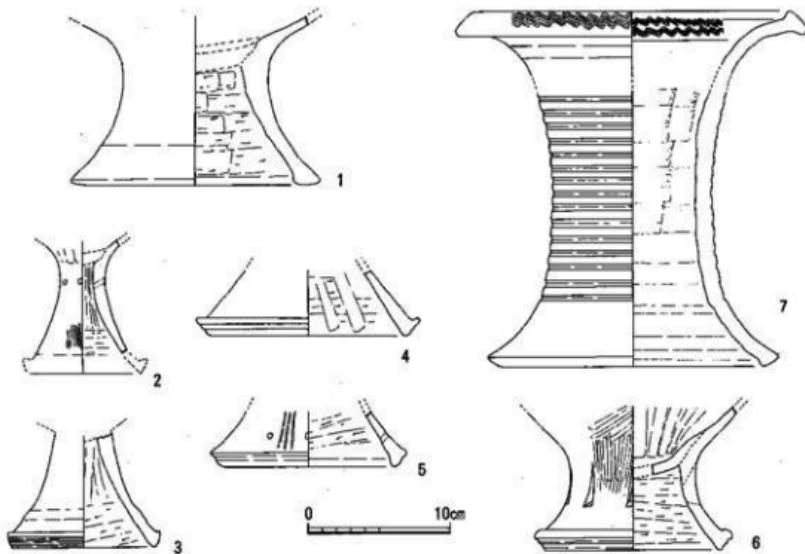
第8図 竪穴住居及びN区出土土器



第9図 SH9202出土土器(2)

部の端面にはいずれも凹線を持つ。11の凹線は沈線状のものである。外面調整はナデあるいはハケで内面はナデ調整が多數を占める。

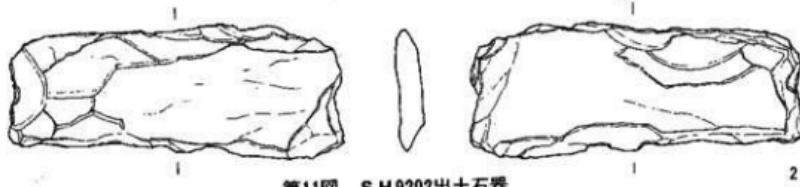
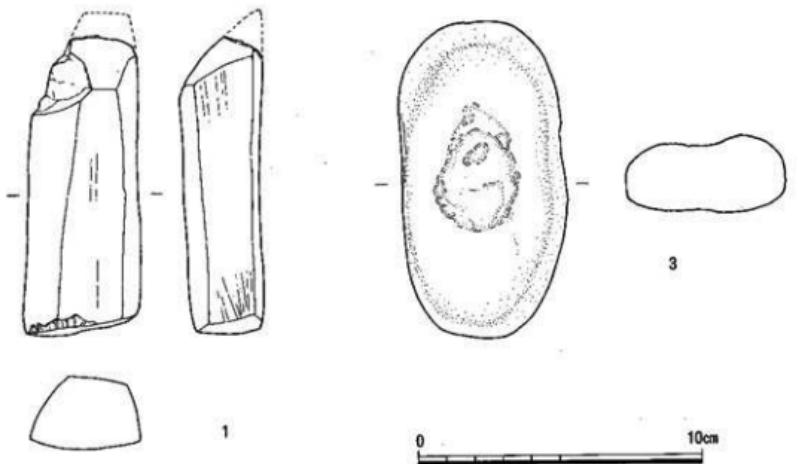
第9図1～12は鉢及び高杯である。1、2は大型の鉢で口径は1が46.8cm、2が33.4cmを測る。口縁部と体部の屈曲は明確でなく、口縁部はやや外傾する。端部は内外に拡張し水平な端面に1は4条、2は3条の凹線を廻らせている。また口縁部の外面にも凹線を3条廻らせている。1は体部内外面ともに丁寧なヘラミガキを施す。3、4は小型の鉢で3の形態、調整は1とほぼ同じである。4は直線的に外傾する体部から強く屈曲して直立する口縁部を持ち、内側に小さく拡張した端面に1条の凹線を持つ。口縁部外面には3条の凹線を廻らせている。体部は内外面ともにヘラケズリ調整を施す。口径19.2cm、器高8.4cmを測る。5～9は直立する口縁部を持ち、端部を5、9は内側に、6、7は内外にいずれも小さく拡張している。6、7の端面はわずかに内傾する。8は口縁部外面に2条の凹線を廻らせている。10は内傾する口縁部を持ち端面は平坦で内傾する。底部は円整充填により成形する。体部調整は外面がヘラケズリ後ヘラミガキ、内面がヘラミガキである。11は直立する口縁部を持ち端部は丸い。外面に4条の凹線を廻らせている。体部の外面調整はヘラケズリで中位はさらにヘラミガキ、上端はナデを施す。12は直立する口縁部の端部を内外にわずかに拡張させたやや内傾する端面に1条の凹線を施す。口縁部外面にも3条の凹線が廻る。体部調整は内外面ともにヘラミガキである。



第10図 SH9202出土土器(3)

13は台付鉢で菱形の体部とくの字に強く屈曲する口縁部を持つ。口縁端部は上方に拡張し端面に2条の凹線を廻らせる。脚と体部は一体として製作され底部は円盤充填により形成している。体部外面には屈曲部よりやや上方の位置にハの字形に刺突文を施す。外面下半部の調整はヘラミガキ、内面調整はハケで上半部はさらにナデ消しを行っている。口径11、8cmを測り、焼成良好で赤褐色を呈する。

第10図は脚及び器台である。1、6は裾幅に対し脚高が短い脚で器壁が厚く重厚な印象が強いものである。1は端部を内側に拡張し、端面は平坦である。内面は横方向のヘラケズリ調整。6は端部を斜め外方に肥厚させ、端面に2条の凹線を廻らす。中央部に9個の三角透しを持つ。脚の内面調整は横方向のヘラケズリ、外面調整はヘラミガキである。2～5は裾幅に違いは認められるが長脚の部類に属する。3、4は端部を斜め上方へ摘み上げて拡張した端面に凹線を廻らせている。内面下半部はヘラケズリ調整を施す。2は脚上端付近に8個の円孔を穿つ。5は端部を斜め下方に拡張し端面に浅い凹線を1条廻らせている。外面に縦方向に3条のヘラ描き沈線を施し、その両側に一対の円孔を穿っている。



第11図 S H9202出土石器

7は口径22cm、器高25.3cmを測る器台である。円柱形の長い胸部外面に15条の凹線を廻らせている。透し孔は穿たれていない。脚部はハの字に開き端部を内側に肥厚させている。口縁部は外反しながら大きく開き、端部を上方に拡張させて内傾する平坦な端面を持つ。端面には6条からなる櫛描波状文を、内面には同じく6条の櫛描波状文を2帯廻らせている。胸部の内面調整は上半部が板ナデ、下半部が指ナデである。

第11図はS H9202から出土した石器である。1は片岩製の砥石で、長さ10.5cm、幅4.1cmを測る。柱状片刃石斧を転用した可能性がある。断面は逆台形を呈し4面に使用痕が認められる。2は結晶片岩製の石庖丁で、長さ11.7cm、幅4.6cmを測る。両面ともに剥離面をそのまま利用し、両端に抉りを持つ。3は砂岩製の凹み石で両面に敲打痕がみられる。

[II]、平成5年度の調査

(1)、基本層序と遺構の概況

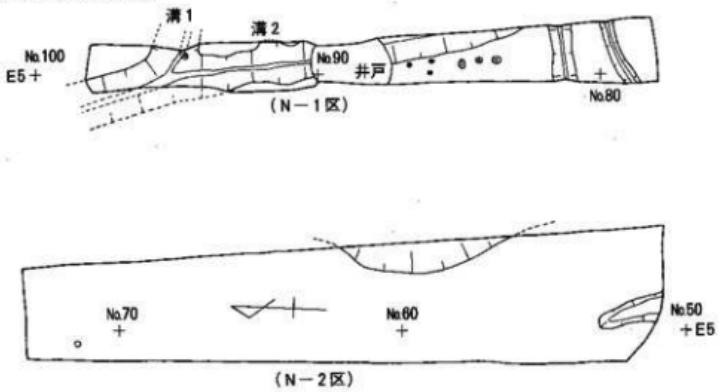
調査前の段階ではN区は水田として耕作されており平坦地形を呈していた。S区は宅地であった部分であるがかつては水田として利用されており、約20cmの客土層を除くと上面はN区と同一レベルにある。したがって全調査対象地が現在平坦地形を成す地区とみなしてよい。4年度で最高所に位置するS-1区とは40cmの比高差があり、全ての調査対象地のなかで最も高い位置にある。特にS区は現県道を挟んで西側に丘陵が迫っている位置にあり、調査の結果でもS区北半部の地山面が24.8mと最高所にあることが判明した。

N区の地山面は2区南端から1区に向って緩やかに下っており、両者の比高差は約1mを測る。N-1区の地山面レベルは23.8~24mで、4年度のS-1区南端付近とはほぼ同一レベルにある。

基本層序は概ね4年度調査区と同様であるが、大きく異なるのは古墳時代前期の遺構面直上に形成されていたV層を欠くこと、4年度S-1区南半部で形成が認められたVI層が全域を厚く覆っていることである。また、4年度調査では洪水堆積層とみなされた厚く粗い灰白色砂層（IV層）は、5年度調査区では単純な包含層として堆積するものではなく大溝の埋土として形成されていることも相違点として挙げられる。

N-1区では調査区を北西隅から南東に向ってほぼ縦断する幅2~4m、深さ1.2~1.5mの大溝を検出した。VI層を切って掘り込まれたもので、断面形はV字を呈する。調査区の北端附近で2条に分岐し1条は東方向に走行している。以下便宜的に東への分岐部分を溝1、南北溝を溝2と呼ぶ。两者はいずれも灰白色粗砂により一時に埋没しており切り合い関係は認められ

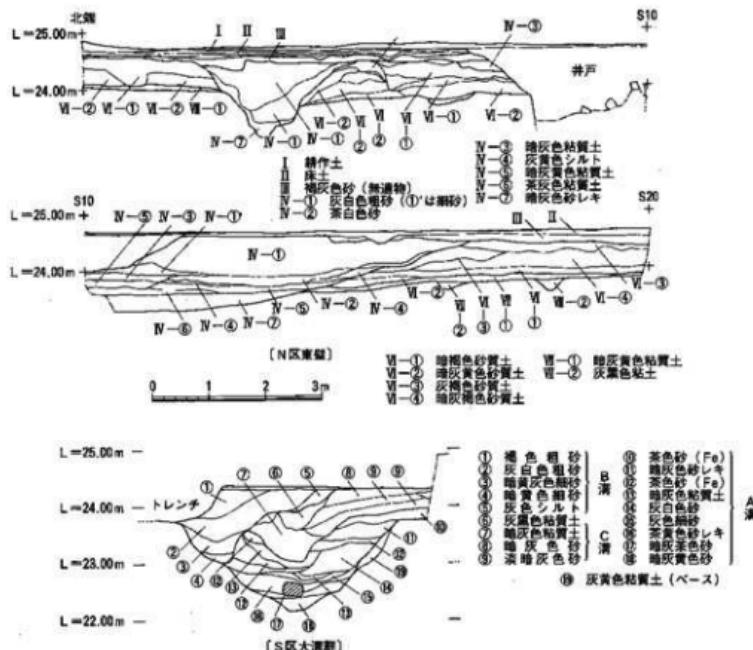
なかった。堆土は3層に大別される。最下層は溝底に堆積した暗灰色砂礫層で比較的堅く締まっている。厚さは20~30cmである。中層は暗灰色粘質土あるいは細砂で下層上及び溝壁に沿ってU字形に堆積している。厚さは5~20cmである。以上の2層の堆積状況からみて比較的穏やかな状態で自然に埋没が進んだものとみなされる。最上層は粗い灰白色砂層で一気に埋没を完了している。厚さは70cm~1mである。この層は自然な埋没を想定するのが困難で、やはり洪水、土砂崩れ等の自然災害により形成されたものとみなすのが妥当であろう。出土遺物については後述するが一部後期に遡る資料もみられるものの、全ての層から布留式中段階~新段階に併行すると思われる土器が出土しており、掘削がこの段階に行われ比較的短期間のうちに埋没したものと考えられる。



第12図 第2次調査遺溝配置図

N-1区中央付近で井戸を検出したが古の記憶に残るものであり層位的にも近世以前のものとはみなしづらい。井戸以南では大溝の延長部とともに地山直上からピット群、溝2条等を検出した。遺物がきわめて少なく時期決定は困難であるが層位的には弥生時代中期末～後期初頭にかけての所産と推定される。N-2区は遺構、遺物ともにきわめて少なく遺構はピット1、大溝の縁辺部、溝を検出したのみである。

S区は調査区を南北に縦断する形で大溝を検出した。また南端付近は厚い砂層堆積が認められたのみで遺物は出土していない。この砂層は2mほど掘り下げたがさらに深く続いている。地山検出ラインが調査区の南西隅付近から北東方向に延びており、このライン以南でこのような厚い砂層堆積が認められたことからみて、この部分は与田川の旧河道に相当するものと考えられる。大溝はこの旧河道に取り付く形で開削されたものである。



第13図 大溝群土層図

大溝は南端の取り付き部分で幅約3m、深さ1.3mを測るが、4m程北の地点から幅4m、深さ1.7mと共に大きく拡大する。断面形も前者はU字、後者はV字と相違をみせる。N-1区の大溝と異なり埋没過程はかなり複雑で、断面観察からは2度の再掘削が行われている状況が読み取れる。以下大溝の土層図をもとに検討を加える。最初の掘削（A溝）は大溝の最下端にまで及ぶもので、幅・深度ともに最大規模を測る。埋土はN-1区大溝のように一時にして埋没したような状況ではなく、下層に砂礫層あるいは粗砂、中層に粘質土、上層に厚い粗砂という水平な堆積状況を示している。比較的穏やかな状態で自然に埋没した様子が看取られる。2度目の掘削（B溝）はA溝の中央付近を再掘削したもので幅約2m、深さは約80cmを測る。底面のレベルはA溝より1mほど高い位置にある。やはり水平な自然堆積状態を示しており、また粘質土の堆積も顕著である。最後の掘削（C溝）はB溝の埋没完了後A溝の西端付近を再掘削するもので、幅約3m、深さ1.4mを測る。底面レベルはB溝とほぼ等しくA溝より1m程高い位置にある。また、N-1区大溝とほぼ同一レベルにある点も注目される。埋土は上下2層に大別される。下層は暗灰色細砂、上層は灰白色粗砂であり、上層は一時に埋没した状況を示している。

出土土器については後述するが、B・C溝から出土した土器は極めて少なくそれらの掘削時期を明確にすることが困難である。A溝下層からの出土土器は概ね庄内式古段階に併行する時期の所産と考えられ、その掘削時期を示しているものと考えられる。また、C溝の埋没状況はN-1区大溝に共通するものであり、布留式中段階～新段階にかけての所産である可能性が高い。B溝は両者の間に位置するものとみなしておきたい。

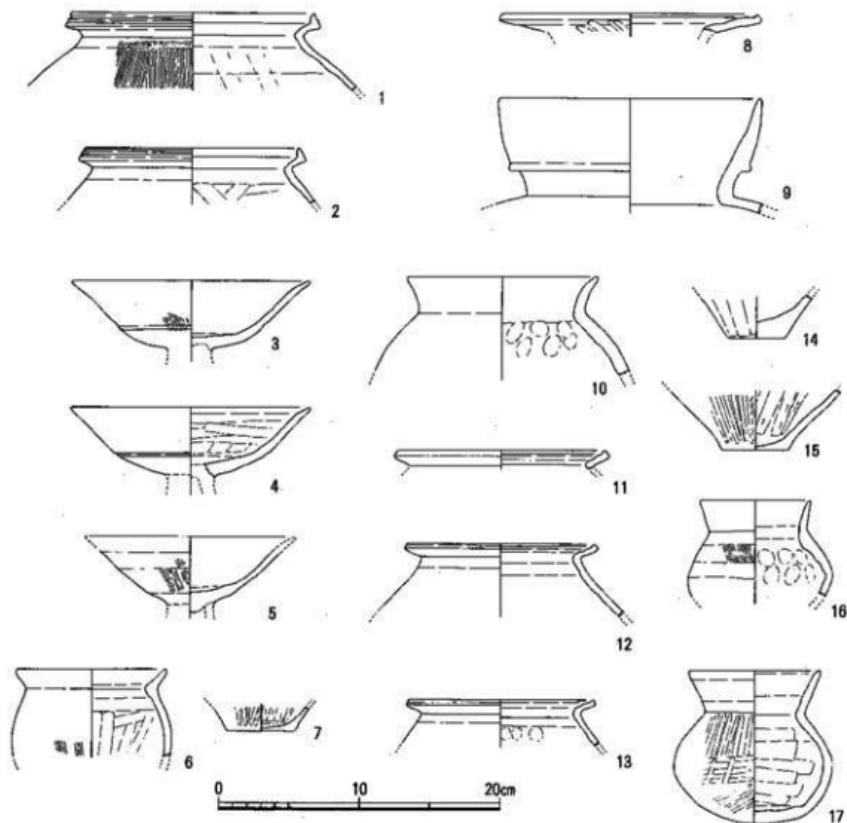
大溝群の与田川旧河道からの取り付き部分では東西両側に段丘状テラスを形成している。このテラス地形は大溝掘削により形成されたものであり、本来は両テラス部分が連続していたものとみなされる。西側テラスは幅1m、長さ7m程度を検出したのみであるが、この範囲で大溝群掘削以前の包含層を検出した。地山直上にはⅦ層が薄く堆積しており弥生時代中期末頃の土器片を少量包含している。その上部には20～30cmの厚さで暗灰色砂の堆積がみられたが、同層中には極めて濃密に遺物が包含されており土器溜りの状況を呈していた。時期的には弥生時代後期後半に位置付けられるものに限られ、一括資料とみなすことも可能と思われる。また、層位的には他の地区で堆積していたVI層に相当する可能性が高く、同層の形成時期を示すものと思われる。なお大溝群はこの包含層を切る形で掘削されており、大溝以東にこの層位は連続していない。

(2) N区出土土器……第14図

Ⅶ層から少量の弥生土器片が、大溝中から比較的多くの古式土器が出土している。

VII層出土土器については國化しうるものが稀少であるためN、S区を一括して報告する。1はS区大溝西側のテラス部分から出土した甕で口径16、9cmを測る。口縁端部を上方に拡張し端面に2条の凹線を廻らせている。体部の調整は外面がハケ、内面がナデである。2はN-1区から出土した甕で口径15cmを測る。口縁端面には退化した沈線条の凹線を2条廻らす。詳細な時期決定は困難であるが概ね弥生時代中期末～後期初頭の所産とみなされよう。

3～7は東方向へ分岐する溝1から出土した出土した土器である。3～5は高杯でいずれも橢形の杯部をもつ。屈曲部も明瞭でなく3はわずかな段差、4は沈線により痕跡的に残存するにすぎない。いずれもナデ調整を施しているが3、5は外面下半にハケの痕跡を残す。焼成、胎土とともに良で黄灰色を呈する。6は小型の甕で口径10、4cmを測る。口縁部は内面にヨコナデを施すことにより内湾傾向をみせる。体部内面は板ナデ調整、外面はハケの痕跡を残す。7



第14図 N区出土土器

は底部で胎土中に角閃石を含む下川津B類土器である。明確な平底で外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリ調整を施す。7については混入品と考えられるがその他の土器は布留式中段階～新段階に併行する時期の所産と推定される。

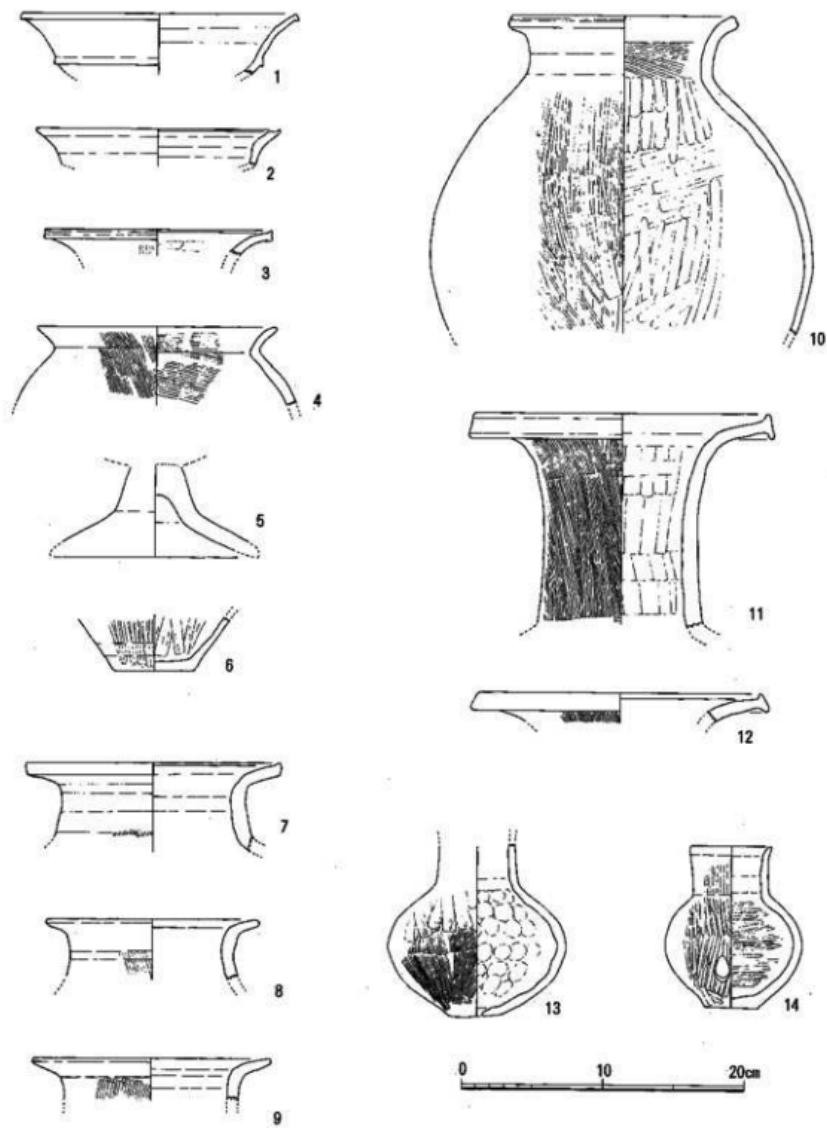
8～17は溝2から出土した土器で、8～11、14、15が下層、17が中層、他が上層の出土である。8は広口壺の口縁部で端部を上方に摘み上げている。内面には強いヨコナデにより凹面が形成されている。9は退化した二重口縁壺で屈曲部は突帯により痕跡的に表現されているにすぎない。口縁部はわずかに内窩傾向をみせる。口径は18.2cmを測る。焼成不良で黄灰色を呈する。10は口径13.3cmを測る甕で、口縁部は緩く外反し端部は丸い。底部内面に指頭痕が残る。11～13は甕で胎土中に角閃石を含む下川津B類土器である。端部は上方に摘み上げて体部内面に指頭痕が残る。14、15は平底の底部で、後者は下川津B類土器である。内面にヘラケズリ、外面にヘラミガキ調整を施す。16、17は小型丸底壺で体部径は口縁部径を上回る。16の外面はハケ後ナデ調整、内面は指頭痕が明瞭に残る。17は完形品で、口径9.2cm、器高10.8cmを測る。器壁が厚く粗雑な作りである。体部外面下半部は横位のヘラミガキ、上半は縦方向のヘラミガキ調整、内面は板ナデ調整を施す。

以上の資料のうち広口壺、下川津B類土器等は弥生時代後期後半の新しい段階に位置付けられ混入品とみなされる。退化した二重口縁壺は鴨部南谷遺跡SH8801に類例がみられ下川津Ⅳ式期に位置付けられている。小型丸底壺の形状、調整等からみても布留式中段階～新段階に併行する時期の所産と考えられよう。

(3) S区出土土器

大溝群及び南端テラス上の包含層（以下南端包含層と呼ぶ）から多量の土器が出土している。第15図1～6が大溝群から出土した土器である。3状の溝からなることは調査終了間際になつて確認したため4、5についてはどの溝に伴うものであるのか不明である。1～3、6は溝Aから出土したものである。

1、2は高杯である。1は杯部中位に明瞭な突帯状の段差を有し上半部は大きく外反する。口縁端部は下方に小さく拡張し端面を持つ。2は下川津B類土器で内面に強いヨコナデにより凹凸が顕著に認められる。3は口径16cmを測る広口壺で口縁端部を上下に小さく拡張し端面に擬凹線をもつ。4は緩く外反する短い口縁部を持つ甕で端部は丸い。体部、口縁部の内外面ともにハケ調整を施す。5は肉厚で短い高杯脚である。6は平底の甕底部で胎土中に角閃石を含む下川津B類土器である。内面のヘラケズリ、外面のヘラミガキが顕著である。大溝の特性上一括資料となみなし難く詳細な時期決定が困難であるが1～3は概ね下川津Ⅳ式（庄内式古段階）に併行するものと思われる。大溝Aの掘削時期もその段階とみなすことができよう。

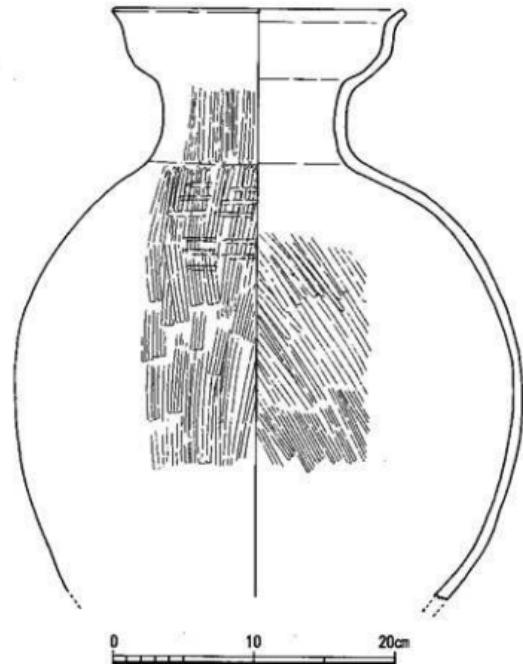


第15図 S区出土土器(1)

南端包含層からは壺、高杯、甕が出土しているが、特に多種多様な壺類が特徴的である。第15図7~12は広口壺である。7~9は外反気味に立ち上がる頸部から短く外方に折れる口縁部を持つ。7は端面を持つが8、9の端部は丸い。いずれも、頸部外面にハケ調整を施すが7はほとんど全て、8は上半部をナデ消している。10は外傾する頸部から短く折れる口縁部を持ち、端面に沈線を1条廻らせている。体部は長円形を呈し、最大径は中位よりやや下方にあるものと思われる。体部の外面調整は上半部がヘラミガキ、下半部がヘラケズリ後ヘラミガキ。内面調整は下半部がナデ、上半部の下半が横方向のヘラケズリ、上半がナデである。頸部は内外面ともにハケ調整。口径15.6cmを測り、焼成やや不良で黄灰色を呈する。11は広口長頸壺で外反気味に長く直立する頸部から大きく開く口縁部を持つ。端部は上下に拡張する。外面は丁寧なハケ調整を施す。12も同様の形態をもつ壺であろう。13は細頸壺と思われる。扁平な球形の体部を持ち底部は平底を留める。底部に焼成後の穿孔を行っている。体部内面には指頭痕が全面に残り外面は丁寧なハケ調整を施している。14は小型の直口壺で口径5.6cm、器高11.4cmを測る。体部中位やや下方寄りの位置に焼成後の穿孔を行っている。外面は縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキを施す。

第16図は大型の壺で外反気味に直立する頸部と大きく内弯する口縁部をもつ。口縁端部は短く外反させている。口径20.2cm、器高48cm程度を測る。体部内面は中位はハケ上半部がヘラミガキ調整。外面はタタキ後ヘラミガキ調整を行っているが、中位はさらにハケ調整を加えている。頸部外面はヘラミガキ。

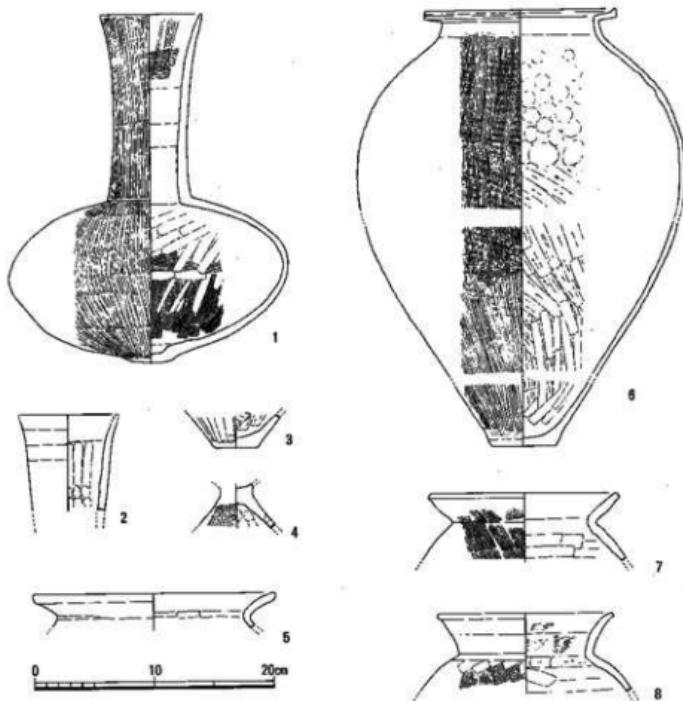
第17図1、2は細頸壺である。1は口径8.4cm器高29.1cmを測る。扁平な玉葱条の体部を持ち平底を留める。頸部は直立した後緩やかに外方に広がるもので端部は丸い。外面は体部、頸部ともに丁寧なヘラミガキ調整を施し、体部内面は下半部がハケ、



第16図 S区出土土器(2)

上半部がハケ後ナデ調整。胎土は精良で焼成も堅緻な精製品である。2は下川津B類土器で外傾する頸部をもつ。4は高杯脚部であろう。脚柱部がなくへの字形に開き円孔を穿つ。外面はヘラミガキ調整、内面には指頭痕が残る。

5～8は甕である。5は緩く外反する口縁部をもつ。口縁部は端部に向って次第に肥厚している。6は下川津B類土器で、口径15.5cm、器高36.6cmを測る。平底を留め体部は肩が張った倒卵形を呈する。体部上端は短く直立する。口縁部は短く体部から水平方向に強く屈曲し端部を上方に掲み上げている。外面調整は体部下半部がタタキ後ヘラミガキ、上半部がタタキ後ハケで上端の直立する部分はさらにナデ消している。内面は肩部以上の部分で指頭痕が残り、中位はヘラケズリ、下端付近はヘラケズリ後ナデ調整を行っている。7は口縁部が体部からくの字に屈曲し、中位で肥厚する。端部に1条の沈線を持つ。外面はハケ調整が顯著である。8は直立気味の外反する口縁部をもち端部は下方にわずかに折り曲げている。



第17図 S区出土土器(3)

第5章 まとめ

2ヵ年にわたる発掘調査によりこれまで単に弥生土器出土地として周知されていた仲善寺遺跡が弥生時代中期末から中世にかけての集落遺跡であることが判明した。調査区の幅が狭いため遺構内容は断片的に把握されたにすぎず、遺構ベース、遺構埋土、包含層がいずれも識別困難な花崗岩風化バイラン土あるいは砂層であったため十分な確認が行えなかった点は否めない。しかしながら、当該期の発掘調査は大内町は言うまでもなく東讃地域東半部（旧大内郡）でも初めてのことであり、断片的とはいえ遺構・遺物内容を知り得た意義は大きい。今後当該地域周辺は大規模開発が予想されており今回の整理報告に際してはそれら開発に対しての埋蔵文化財の保護及び調査・研究の基礎となる視点の提示は不可欠と考える。そこで、ここでは出土遺物に関する若干の検討を行いながら各時期毎の遺跡の構造、様相等について検討を加えまとめてみたい。

(1) S H9202出土土器について

第1次調査で検出したS H9202からは極めて多量の土器が出土しており良好な一括資料とみなされる。全体的には弥生時代中期末～後期初頭の範囲内で把えられようが、県内では弥生時代中期後半段階の土器編年については紫雲出山遺跡、矢ノ塚遺跡の整理報告の中で詳細に検討されているもののこの段階から後期前葉にかけての様相は今一つ明らかではない。また、東讃地域では近接する時期の資料が極めて少なく、数少ない調査例も未公表であるため地域内での比較が困難な状況にある。そこで、ここではS H9202出土土器の諸器種が持つ特徴をまとめながら周辺地域の変化方向も参照しつつ編年の位置付けについて検討を加えることにしたい。

壺、甕については全容を知りうる資料に恵まれないが、およよその傾向は伺い知ることができる。壺は長頸壺、短頸壺が出土している。長頸壺は頸部に凹線を廻らせる点が特徴的である。甕、壺ともに口縁端部には凹線を廻らせているが、退化した沈線状の凹線を施したもの、無文のものもある。これらは凹線文盛行期の端部形状としては後出的な特徴として挙げられる。一方、頸部には凹線文が残存しており、ヘラ描沈線は認められない点は中期的様相を留めるものとみなされる。

高杯、鉢についてはほぼ全容を知りうる良好な資料に恵まれた。大型鉢（高杯）は体部と口縁部の屈曲が明瞭でなく端部を内外に拡張し端面に凹線を持つ。同様の特徴を持つ県西部の紫雲出山遺跡、矢ノ塚遺跡出土品と比較し体部（杯部）が浅くなってしまっており後出する特徴として挙げられよう。小型鉢は大型鉢と同一の形状・調整を持つものの他、直線的に開く体部から垂直

方向に強く折れて立ち上がる口縁部を持つものがある。後者は口縁部外面に凹線を持ち体部外面の調整がヘラケズリである点に特徴がある。算盤玉状の体部を持つ台付鉢は中部瀬戸内地域でみられるもので、岡山県南では中期末の仁伍式（上東鬼川市0式）に位置付けられている。

高杯は体部から強く屈曲して直立する口縁部を持つものが多數を占め、内傾・外傾する個体も散見される。紫雲出山遺跡、矢ノ塚遺跡では一般的にみられるC字形に内弯する口縁部はみられない。この点は時期的に後出する特徴とみなしうる可能性も高いが、岡山県南地域では中期後葉（前山II式）に仲善寺遺跡と同様の形状を持つ高杯が一般的であることを考えれば地域的な特徴、関係を示すものとも考えられる。また、口縁部外面に凹線を持たない個体が過半数を占めているが、この点も仁伍式の特徴とされている。口縁端部はわずかに内外に拡張するものがあるが顕著ではない。大空遺跡出土品と比較して先行する要素として重要である。

器台は口縁部・裾部を除く胴部の全面に凹線を廻らせ口縁部の内外に櫛描文を施している。透し孔がみられない稀少な例であるが、凹線施文範囲がやや縮小傾向にあること、器壁が厚さを増していることなどは新しい要素であろう。ただ、口縁部内外面に櫛描波状文を施している点は中期的様相を留めるものとみなしておきたい。

以上の諸特徴からすれば紫雲出山III式、矢ノ塚V式に併行あるいはやや後出し、大空式に先行する時期の所産とみなすのが妥当であろう。諸器種の特徴に岡山県で中期末に位置付けられている仁伍式に共通する部分が多い点が注目される。特に高杯、鉢の形状、文様等は香川県西部の紫雲出山遺跡、矢ノ塚遺跡と異なる部分が多く岡山県南地方により近い。地域間の交流を知る上で重要な点であろう。

(2)、仲善寺遺跡の形成と展開

仲善寺遺跡は弥生時代中期末から中世にかけての複合遺跡である。調査区が狭かったため遺構内容の特徴については不明瞭な部分が多いが、各時期の出土品には地域の特徴や小地域間の交流関係などを伺わせる特徴が見出だせる。そこで、出土土器・石器等を中心に各時期ごとの遺跡内容の特徴を検討しながら仲善寺遺跡の形成と展開についてまとめておきたい。

(I期)

弥生時代中期末から後期初頭にかけての時期で、第1次調査では堅穴住居2棟、ビット群、溝を、第2次調査ではビット、溝等を検出している。また、2ヵ年の調査区のはば全域で同時期の包含層が形成されており、遺構内容・遺跡範囲とともに最も充実していた段階である可能性もある。西方の丘陵から東に向って下る緩傾斜部に集落域が展開していたものと思われる。

S H9202出土土器には岡山県南地方の影響が認められたが、石庖丁は吉野川南岸産の結晶片岩を利用しており県西部地方よりもむしろ他県との関係が密接であったことを伺わせる。当遺

跡のみの特徴と見えるよりは東讃地域東部に一般的な傾向とみなすべきかもしれない。

(Ⅱ期)

弥生時代後期中葉から後葉の古い段階で、平成5年度S区南端包含層が当該期に位置付けられる。今回の調査では後期前半段階の資料を欠くため、Ⅰ期以降若干の空白期が存在したことになる。また、4年度の調査では確実な当該期の資料は検出しておらず、5年度S区等与田川西岸の段丘部を中心に限定された範囲で遺跡が展開していた可能性が高い。南端包含層出土土器中には結晶片岩を胎土に含むものもあり以前として阿波地域との関係が伺えるが、角閃石を胎土に含む下川津B類土器の出土が顕著であることから高松平野西部地域との関係も密接であったものと考えられる。各種壺類の出土が顕著であったが、広口壺では長い頸部から大きく外反する口縁部を持ち端部を上下に拡張するものと、短く直立する頸部から短く外反する口縁部を持つものとに大別される。精製された細頸壺の出土が顕著であるという特徴も指摘できよう。

(Ⅲ期)

弥生時代後期後半の新しい段階から庄内式古段階に併行する時期で、良好な一括資料を欠くものの5年度S区大溝群のうち最も古いA溝が開削された時期である他、同年度N区溝1最下層出土土器の大半がこの段階に位置付けられる。平成4年度S-3区以北にはⅥ層の形成がみられなかったことからS-2区以南に同時期の集落遺構が展開していたものと推定される。また、県営圃場整備に伴う4年度の試掘調査ではⅢ期からⅣ期にかけての土器が比較的多く出土しており東西方向に長く集落が広がっていた可能性が高い。

溝A及び溝1最下層出土土器には引き続き下川津B類土器が多く含まれ、以前として高松平野西部地域との関係が密接であることを物語っている。溝Aについては起点付近を検出したにすぎないが丘陵の傾斜方向に直行する形で掘削されているもので、遺跡北方の低地に向って走るものと推定される。集落の環濠である可能性もあるが時期的に想定が困難であろう。与田川の段丘部を起点としていることからすれば大規模な灌漑用水路とみなすべきではないかと思われる。与田川からの取水を必要とするほどに可耕地が拡大していたものと考えておきたい。

(Ⅳ期)

布留式段階併行期の時期でⅣ層、Ⅴ層出土土器が該当する。良好な遺構内の一括資料を欠くため細分は避けておくが、Ⅴ層出土土器にやや古い様相を持つものが多く認められる。同層は4年度調査対象地のほぼ全域を覆っているため遺跡の北半部に同時期の遺跡が広がっているものと推定される。また、Ⅶ層上面が同時期の遺構面として機能しており、ピット等検出した各遺構の帰属時期を示しているものと考えられる。5年度S区溝Bについても布留式古段階を中心とする時期の所産である可能性が高い。

5年度S区溝Cは布留式中段階からやや後出する段階にかけての時期に掘削されたものと推定されるが、4年度調査対象地の全域に厚く堆積したⅩ層（灰白色粗砂）出土土器も当該期の

土器を比較的多く包含する。集落遺構は検出してないためその内容・展開については不明瞭であるが、遺物量はかなり多く周辺地域に同時期の集落が広がっていたことは確実である。

この新しい段階は時期的に大内町内で唯一の前方後円墳である大日山古墳の築造期に相当する可能性も高く、仲善寺遺跡の集団もその勢力基盤の一つに挙げられよう。この時期までの長期間はほとんど断絶することなく集落が継続している事象は在地勢力がその集落域を保持・存続させてきたものとみなされる。町内の他の遺跡については動向が不明であるがこのような諸集団の頂点に立つ首長の墓が大日山古墳であるとすれば、その築造は在地勢力の成長・発展の跡を示していることになろう。一方で土器にみられた庄内式段階までの高松平野西部地域や阿波地域との関係はほとんど伺えなくなり、畿内勢力との直接的な関係が大日山古墳の築造を可能にしたとの見方も可能であろう。さらに、この段階以降仲善寺遺跡の長期間にわたる断絶は周辺地域における大規模古墳の断絶と軌を一にするものであり、大きな政治的変動を経験した可能性を示唆している。いずれも今回の調査のみでは想定困難な仮説にすぎないが、今後周辺地域の調査において明らかになることを期待しておきたい。

(V期)

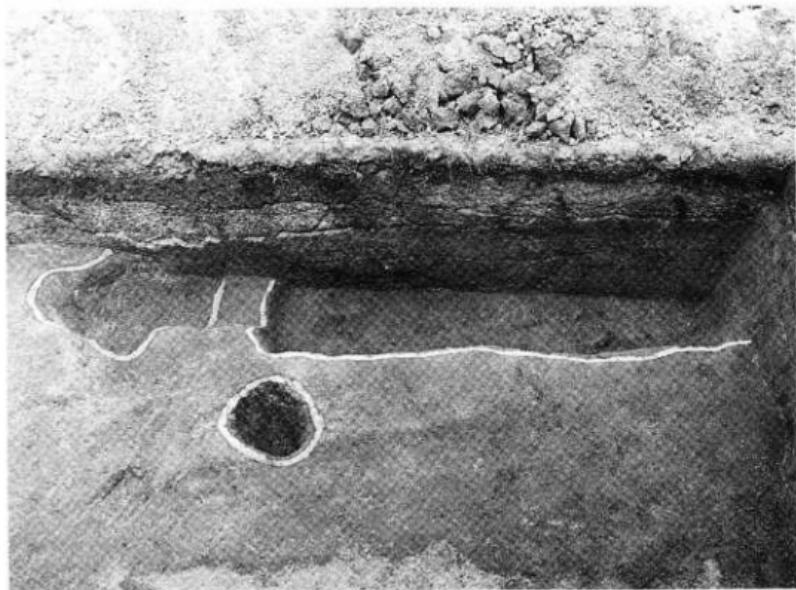
中世前半の13世紀を中心とする時期であり、N層上面より溝、焼土塊、ビット等を検出している。5年度調査区では同時期の遺構・遺物はほとんど検出しておらず、集落域は4年度S-3区以北に限定できるようである。地形的に西方の小規模な谷筋が開く位置にあり、谷最奥部に所在したと伝えられる仲善寺跡と関係をもった集落域が展開していたものと考えられる。

以上検討を加えてきたとおり仲善寺遺跡は弥生時代中期から中世にかけての複合遺跡であることが判明した。特に弥生時代後期後半から庄内式段階にかけての土器には高松平野西部地域や阿波地方との密接な関係が伺われ、大内町内の集団が持つ政治・社会的性格を示唆しているものと思われる。独自の文化圏を保持していた両地域の中継地点としてあるいは交流の窓口としての性格はその一つとして認めることができるであろう。地域間交流の具体相を検討するうえで仲善寺遺跡ひいては大内町内の諸遺跡が重要な鍵を握っているものと思われ、今後の周辺地域の調査が期待される。

図 版



1-1 4年度S-1区全景



1-2 SH901検出状況

図版 2



2-1 4年度S-2、3区全景



2-2 4年度S-4区全景



3-1 4年度N区南半部



3-2 4年度N区SH9202

図版4



4-1 5年度N-1区全景(東から)



4-2 5年度N-1区全景(西から)



5-1 5年度N-2区全景(東から)



5-2 S区南端テラス上壺出土状況

图版 6



6-1 5年度S区大沟群土层



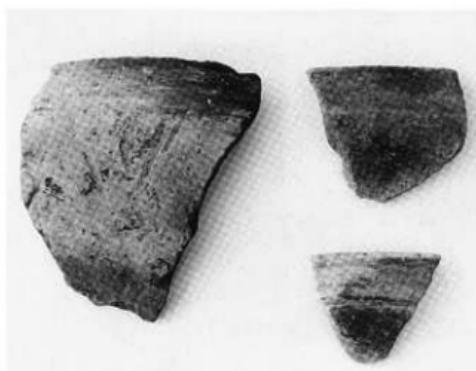
6-2 5年度S区大沟群土层近景



第4図



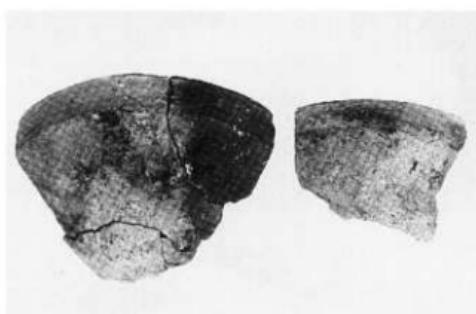
第9図 10



第9図 1, 2



第10図 7



第9図 4



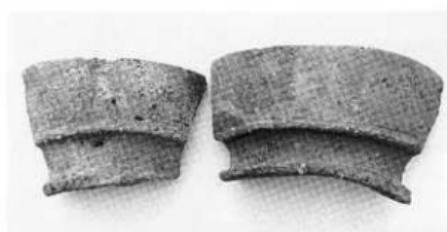
第11図 石器類



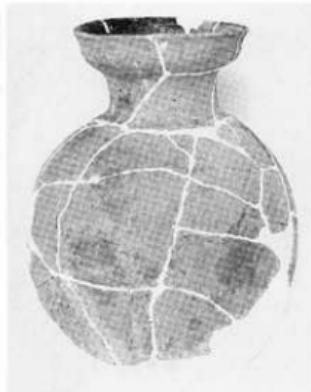
第14図 3



第14図 17



第14図 9



第16図



第17図 6



第17図 1

(付編) 西尾遺跡

例　　言

1. 本書は県道高松長尾大内線道路改良工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡は香川県高松市十川西町に所在する。
3. 調査は平成4年度に香川県土木部道路建設課より依頼を受け、香川県教育委員会が実施した。
4. 調査は文化行政課主任技師國木健司が担当した。
5. 本書挿図中のレベル高はすべて海拔、方位は真北を示す。また、挿図の一部に建設省国土地理院発行の25,000分の1の地形図「高松南部」を使用した。
6. 発掘調査、整理作業を通じて香川県高松土木事務所、高松市教育委員会、財香川県埋蔵文化財調査センターその他関係者各位より多大なご協力、ご援助を得た。
7. 本書の執筆、編集は國木が行った。

目 次

第1章	調査に至る経過	1
第2章	立地と環境	2
第3章	調査の方法及び経過	4
第4章	調査の結果	8
1区		8
2区		12
3区		15
第5章	まとめ	21

挿図目次

第1図	周辺の遺跡地図	3
第2図	調査対象地位置図	4
第3図	調査区配置図	5
第4図	1区遺構配置図	6
第5図	2、3区遺構配置図	7
第6図	S B01実測図	9
第7図	S B02実測図	10
第8図	S B03実測図	11
第9図	1区出土土器実測図	11
第10図	S B04実測図	12
第11図	2区出土土器実測図	13
第12図	S B05実測図	15
第13図	S B06実測図	16
第14図	S B08実測図	17
第15図	S B08実測図	18
第16図	3区出土土器実測図	19

図版目次

図版1-1	1、2区調査前の状況	図版1-2	1-S区溝群検出状況
図版2-1	1-S区溝群完掘状況	図版2-2	1-S区全景
図版3-1	1-N区全景（東から）	図版3-2	S B01、02全景（南から）
図版4-1	1-N区S B03	図版4-2	2区東半部全景
図版5-1	2区S B04	図版5-2	3区調査前の状況
図版6-1	3区完掘状況全景	図版6-2	3区北東端部付近
図版7-1	S B05、06全景	図版7-2	S B07全景（南から）
図版8	遺物写真		

第1章 調査に至る経過

東讃地域内陸部の主要幹線道路である県道高松長尾大内線のバイパス工事は20年ほど前に開始され、現在もなお高松市内区间と木田郡三木町区间で整備が進められている。平成4年度には東四国固体が本県で開催されることになり、未開通区间の整備が本格化することになった。同路線の東半部にあたる三木町～大川郡寒川町間の建設は断続的に進められてきたが、その間に石田高校校庭内遺跡、加藤遺跡、布施遺跡、下屋遺跡、尾崎西遺跡等東讃地域の拠点的な遺跡の発掘調査が行われてきた。西半部の高松市内区间については昭和63年度に小村町内で一部試掘調査が行われたが、本格的な発掘調査はこれまで実施していなかった。

平成4年8月に至り県道路建設課と高松土木事務所より高松市十川西町において同路線のバイパス工事を実施したい旨の協議があった。県道三木郡分寺線と県道屋島塩江線間の水田地域を斜めに横断する形で延長約850m、幅約23mの4車線道路を整備するというものである。計画地内には周知の埋蔵文化財包蔵地は所在していないが、地形等からみて遺跡が所在している可能性は十分に考えられたため、事前に分布・試掘調査を実施することで調整がまとまった。

分布調査は全域を対象に平成4年8月13日に行った。工事予定地は中央付近の南から北に向って長く派生する低い丘陵状の微高地部分と、その東西両側の流路部分とに大きく分けられる。中央微高地部分には土師器片の散布も認められた。微高地東側の流路部分は地形的に傾斜変換が明瞭であり遺跡所在の可能性が認められなかつたが、西側流路については小規模な流路の存在は予想されたものの、その位置、規模等については現在の地形から想定することが困難であった。そこで、微高地以西の延長約700mの範囲について試掘調査が必要と判断した。

試掘調査は稲刈が終了した同年11月2日から4日にかけて行った。対象地のうち微高地部分を中心に11箇所のトレンチを設定した。西側流路部分に設定したトレンチでは厚い砂層堆積を確認したのみで遺物の包含も認められなかつた。微高地の稜線部以西についても削平が著しいためか耕作土直下が地山となり遺構の所在は確認されなかつた。微高地中央付近ではやはり削平が著しいものの多数のピット群、溝等とともに奈良時代を中心とする須恵器等の遺物が出土したため、当該期の集落遺跡が所在しているものと考えられた。

以上の試掘調査結果をもとに道路建設課とあらためて協議した結果、奈良時代の集落遺跡が所在している延長70mの範囲について工事着手前に発掘調査を実施すること、工期の関係から調査を次年度送りにすることが困難であったため事前調査は5年1月に文化行政課の直営事業として行うこと等について調整がまとつた。こうして平成5年1月13日から実働10日間の予定で対象地1500m²の事前調査を実施することになった。

第2章 立地と環境

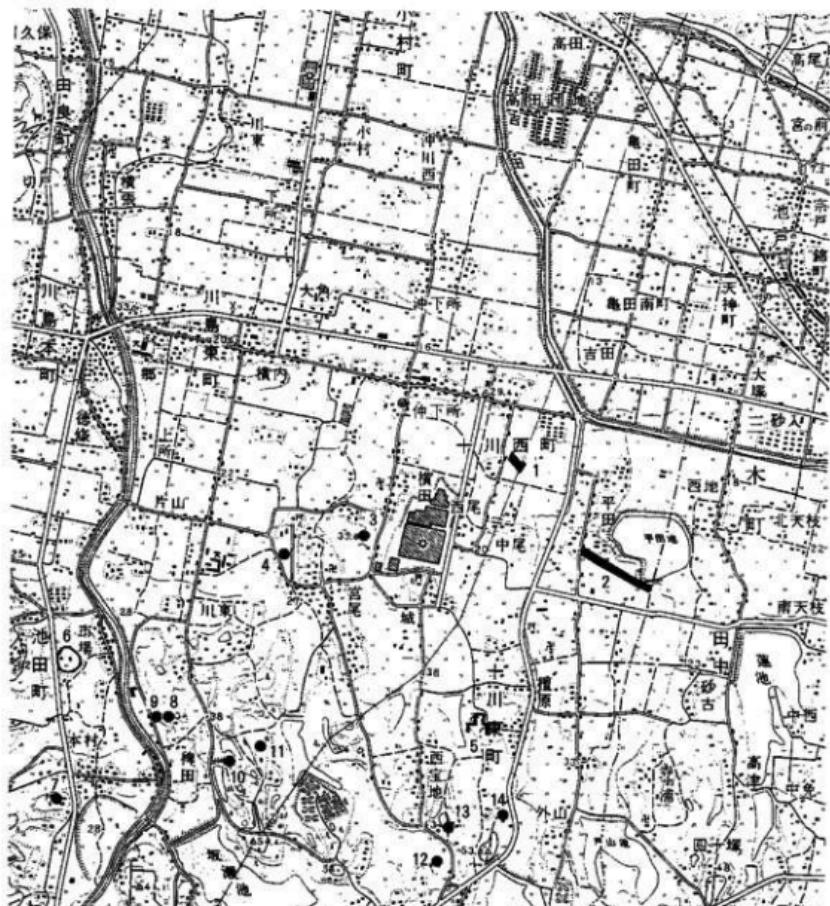
高松市の南部丘陵地帯は春日川を境に東西両側で地形上の明確な違いがみられる。西側では北方平野部との境付近に標高200m前後の独立丘陵が数多く所在しており、その間に谷筋、低丘陵が入り組んだ複雑な地形が形成されている。東側については独立丘陵の形成はみられず南から北に向って細長く延びる尾根、丘陵とその間の谷部とによって構成される。東西方向については起伏に富んだ地形であるが、概して春日川以西の地域より単調な地形とみなされる。

春日川以西の丘陵地域には数多くの古墳が所在しており、またこれまでの調査により縄文時代以降の多種多様な遺跡の所在が確認されている。弥生時代前期の環濠集落である光寺山遺跡、弥生時代後期以降の墳墓群が検出された三谷通谷遺跡、古墳時代前期から中期にかけての小日山1号墳、三谷石舟古墳、高野丸山古墳等の大規模古墳群、初期須恵器窯跡である三谷三郎池西岸窯跡等著名な遺跡が数多く、古代にも三谷駅が設置されていたとみなされるなど本県の考古学研究上重要な位置を占める地域として挙げられる。

春日川以東の地域についてはこれまで本格的な調査が実施されたことがなく、遺跡の分布も極めて稀薄であるという特徴がある。わずかに丘陵先端付近に築造された直径約35mの大規模な円墳である西尾天神社古墳、中世城館として著名な十川城跡等が知られているにすぎない。むしろ、東植田町から三木町田中地区にかけての南方丘陵地域の小規模な盆地状の谷部に縄文時代以降の遺跡が数多く所在している感がある。下司遺跡、竹元遺跡、丸山古墳、城池古墳群（15基以上）、公潤池窯跡群、下司廃寺等で質・量とも現時点では丘陵北縁部地域を圧倒している。

西尾遺跡はこの北方丘陵地域の縁辺部に位置している遺跡である。南から長く延びる丘陵部は遺跡が所在している地域付近で低平となり、その北方は谷部が沖積作用により埋没し概ね平坦な地形となる。西尾遺跡の北方及び西方の平野部には現在方格地割が明瞭に残るが、丘陵部及び谷水田部は地形なりに開墾が進められたため地割の乱れが明瞭に読み取れる。そのような中にあって西尾遺跡が所在する丘陵部は比較的高所にまで方格地割が及んでいる地域であり、計画的に開発・開墾が行われた結果とみなすことが可能である。

西尾遺跡が所在する丘陵から谷筋を挟んで東側の丘陵部には、今年度の試掘調査によりその東側斜面を中心に弥生時代中期から近世にかけての集落遺跡である十川東平田遺跡の所在が確認された。また、北方約200mには旧南海道と推定される東西道が走っており、西尾遺跡との関連は無視できないものがある。



- | | |
|------------------|-------------|
| 1 西尾道路（今回調査） | 8 川東1号墳 |
| 2 十川東平田遺跡（弥生～近世） | 9 川東2号墳 |
| 3 西尾天神社古墳（径35m） | 10 天親塚 |
| 4 松宇八幡馬場古墳 | 11 こんばううじ古墳 |
| 5 十川城跡 | 12 出之山南古墳 |
| 6 光尊寺山遺跡（縄文～中世） | 13 出之山古墳 |
| 7 池田合子神社古墳 | 14 出之山北塚 |

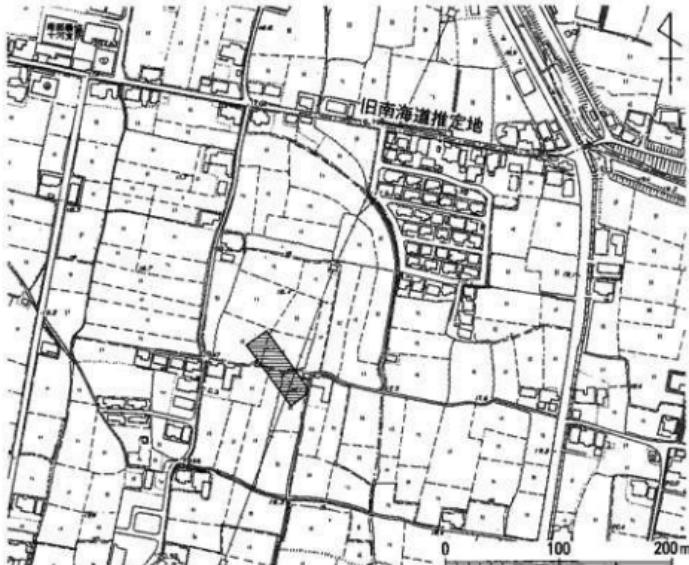
第1図 周辺の遺跡地図 (1/25,000)

第3章 調査の方法及び経過

調査対象地は延長約70m、幅23mで水路等を除く調査可能面積は約1500m²である。対象地の東西両側は工事が発注されており廃土置場を確保できなかったため調査は道路センターラインを境に南北2分し反転調査を行うことを基本とした。現在の地図も複雑に入り組んでいるため第3図のとおり調査区を1~3区に大別した。

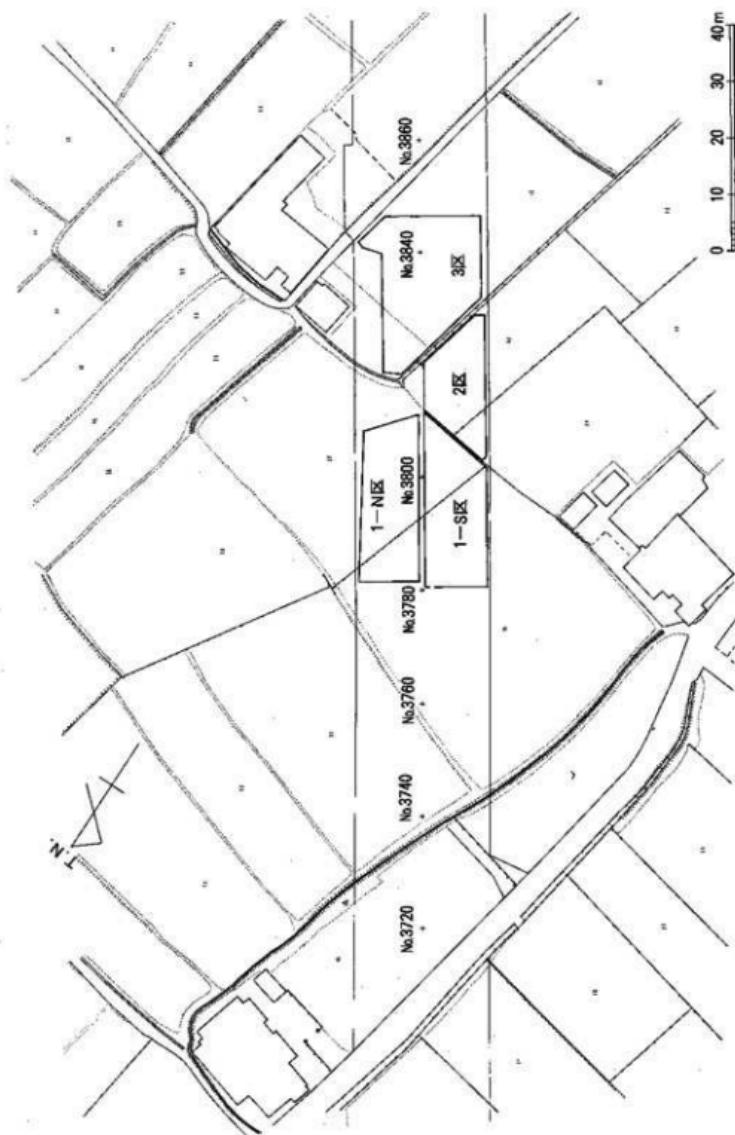
調査は1-S区から開始した。重機を使用して耕作土及び床土を除去した後人力精査を行っている間に2区の耕作土除去等を行った。1-S区は最も遺構密度の希薄な調査区であったが、西端付近で南北方向に走る溝群を、南端付近で東西溝を検出した。2区は削平がさほど顕著ではなく東端付近には須恵器等の包含層も残存していた。遺構密度も最も高く本来尾根筋線上に相当する位置でもあるため、集落域の中心的位置を占める地区と推定された。掘立柱建物群、土坑、溝等を検出している。

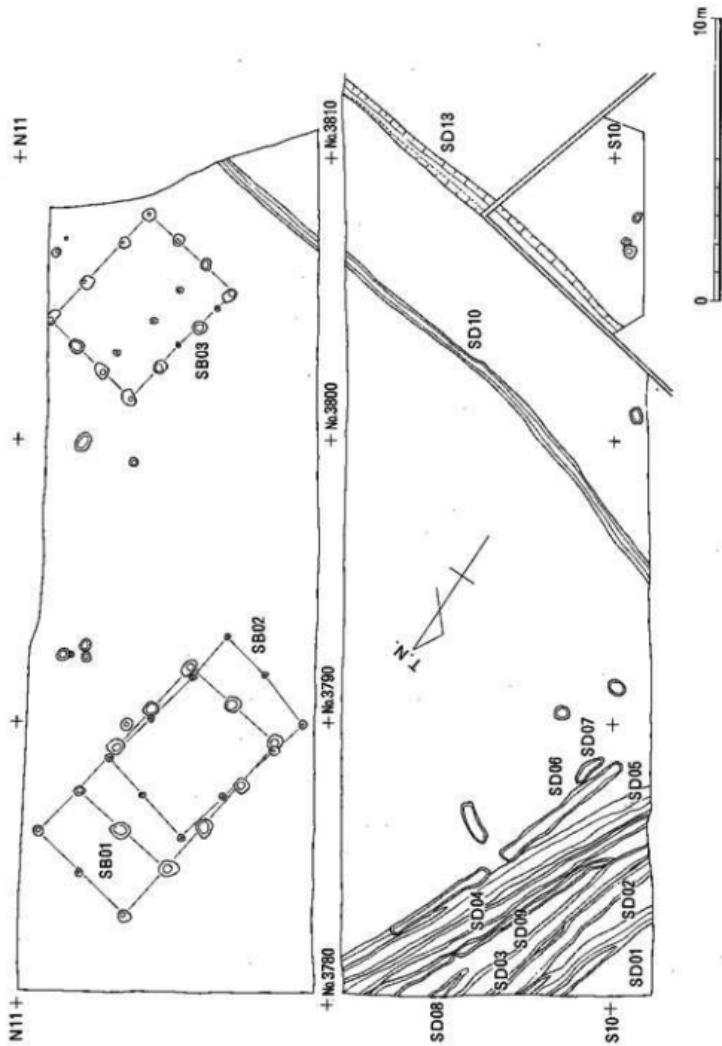
以上の2地区の調査終了後1-N区及び3区の調査に移った。1-N区は削平が著しくまた遺構密度もさほど濃密とは言えないが掘立柱建物3棟等を検出している。3区はやはり削平が著しいが掘立柱建物4棟以上、多數のピット群、溝、土坑等を検出している。



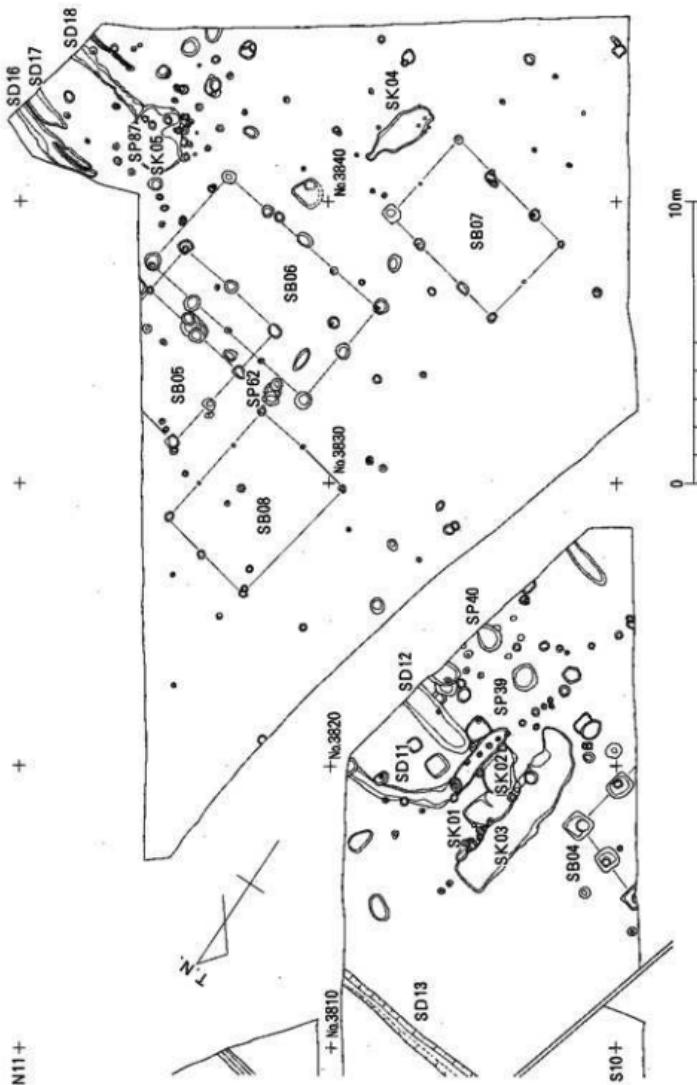
第2図 調査対象地位置図

第3図 調査区配置図





第4図 1区造構配置図



第5図 2、3区造構配置図

第4章 調査の結果

1、1区

削平が著しく遺構の保存状態は良好とは言い難く、多くの遺構は消失しているものと思われる。S区西端付近で南北方向に走る溝を9条(S D01~09)、S区南端付近からN区東端付近にかけて東西方向に走る溝1条、N区で掘立柱建物3棟(S B01~03)等を検出した。以下、各遺構ごとに概要を報告する。

①、S D01~09

いずれもほぼ南北方向に平行して走る溝群である。各溝の肩付近で切り合い関係にあるものがあり、S D02はS D01を切り、S D02、03、09については09→03→02の順で、S D04~06については05→04→06の順でそれぞれ掘削されたものと考えられる。幅は30~80cm、深さは5~26cmの間に分布する。濃淡はあるが埋土はいずれも暗茶灰色粘質土である。細かくみると西半部のS D01~03と東半部のS D04~06、09については走行方位に10°程度の振れがある。後述する掘立柱建物群にも主軸方位に若干の振れがみられるため対応関係があるのかもしれない。出土遺物が極めて少ないため各溝の詳細な時期決定は困難であるが、切り合い関係、走行方位等からみて同時期に機能していたものは3条以下であったものと考えられる。

出土遺物は須恵器、土師器のみで固化可能なものはS D03及び05出土品のみであった。第9図3~6はS D03出土土器である。3~5は須恵器である。3、5は杯身である。3は直線的に開く体部をもつ。5は底部片で高台をもつ。高台は底部端に付き、内側で接地する。6は口径26、1cmを測る長胴甕で口縁部端部を内側に折り曲げている。7、8はS D05出土須恵器である。7は杯身で直立する高台をもつ。8は器壁が薄く直線的に開く体部をもつ。全容の判明するものがみられないが、概ね8世紀代に位置付けられるものと考えられ、溝群の掘削、機能期間の中心が同時期に位置付けられるものと推定される。

②、S D10

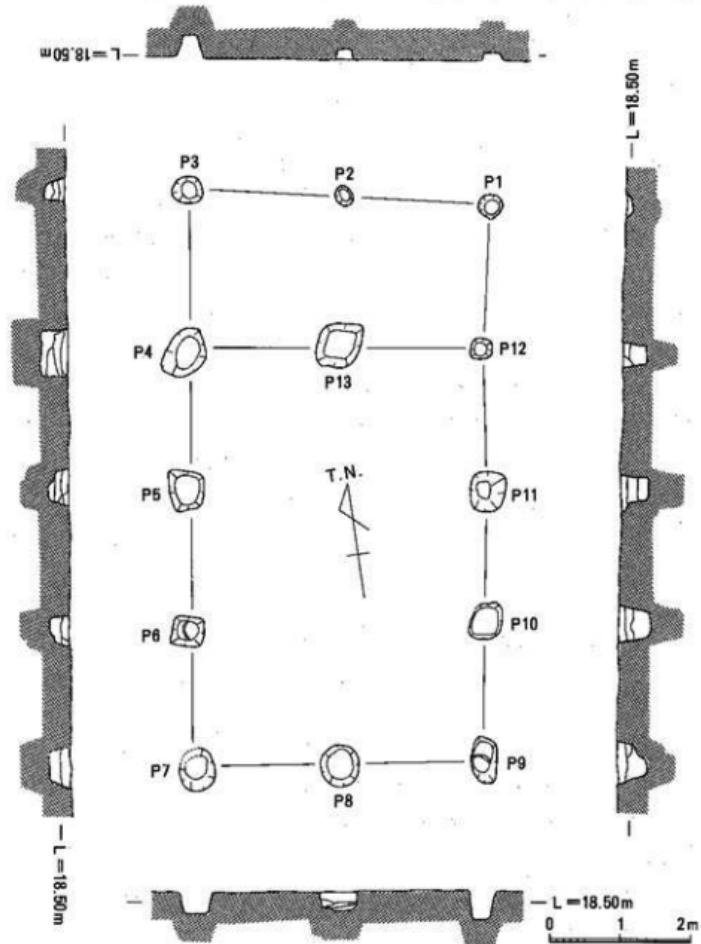
1区の南辺付近の東西に走る溝で、幅30~50cm、深さ15cm前後を測る。調査区内を直線的に横断するものではなく中央付近は南に弧状に湾曲している。西端溝群とは直交する方向に走っていることから、いずれかの溝に連結しているものと推定される。

須恵器片が少量出土している。9は高台付き杯身で底径10cmを測る。高台は肉厚で低く、底面全体で接地する。8世紀でも後半期の所産と考えておきたい。

③、S B01

南北4間、東西2間の掘立柱建物跡である。梁行、桁行ともに柱心間距離はいずれも2mであり、建物全体の内法は8×4mを測る。北辺のP1～P3が径30～40cmと小規模である以外は、径50～60cm、深さ40cm前後と比較的大型の掘り方を持つ。居住空間の主柱穴としてはP4～P13を想定すべきかもしれない。主軸方位はN 8°Eである。

主柱穴の埋土中から須恵器、土師器片が出土している。第9図1が唯一図化可能な須恵器杯



第6図 SB01実測図

身である。直立する高台をもち、体部は緩く外反する。口径は14cm前後と推定される。8世紀前半に位置付けられるものと思われる。

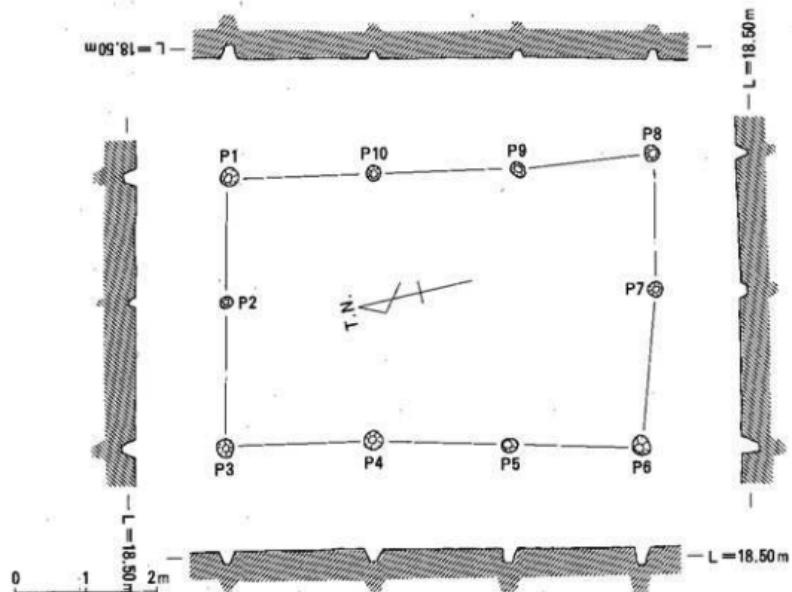
④、S B02

S B01とはほぼ同じ位置に建てられた南北3間、東西2間の掘立柱建物跡である。P10がS B01の主柱穴を切っており後出することが明らかである。主柱穴はいずれも円形あるいは不整円形で径24~30cm、深さ10~25cmの間に分布する。埋土はS B01と同様の暗灰黄色粘土である。梁間、桁間ともに、1.9~2.1mの間に分布し、建物全体の規模は南北6m、東西4mを測る。主軸方位はN12°EでS B01より4°東に振っており、S D01~03の走行方位と同一である点が注目される。

ピット中から須恵器、土師器片が少量出土しているが時期を決定しうるものはない。ピット埋土、切り合い関係からS B01よりわずかに後出する時期を考えておきたい。

⑤、S B03

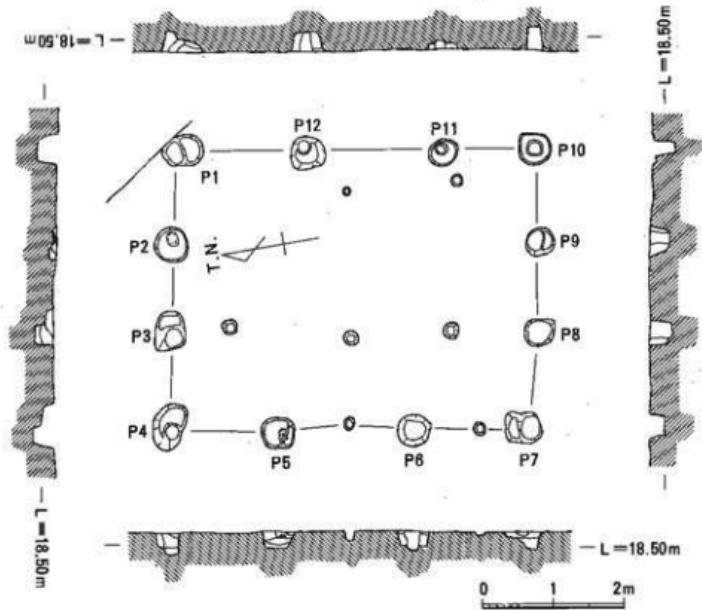
1-N区東端で検出した南北3間、東西3間の掘立柱建物跡である。梁間、桁間ともに一定ではないが、前者は1.2~1.4mの間に、後者は1.4~2mの間に分布し後者を長く設定している。建物全体の規模は南北5.1m、東西4mを測る。主軸方位はN10°Eである。



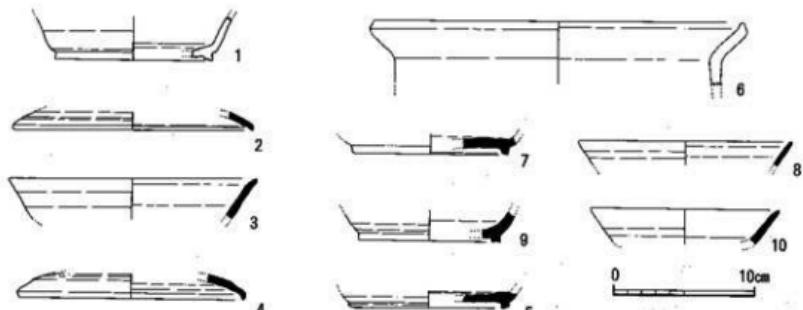
第7図 S B02実測図

各土柱穴は円形あるいは不整円形を呈し、径は40~65cmの間に分布する。深さは一定ではないが、ほとんどが2段掘りのものであるほか、P2及びP5が小塊石を根石として使用している。柱痕が残るビットも多く各柱径は20cm前後と推定される。建物西辺及びP3とP8を結ぶラインには径15~20cmの小ビットが配置されており、支柱の柱穴とみなしてよいであろう。

第9図2の須恵器杯蓋がビット中から出土しており、8世紀代の所産と推定される。



第8図 SB 03実測図



第9図 1区出土土器実測図

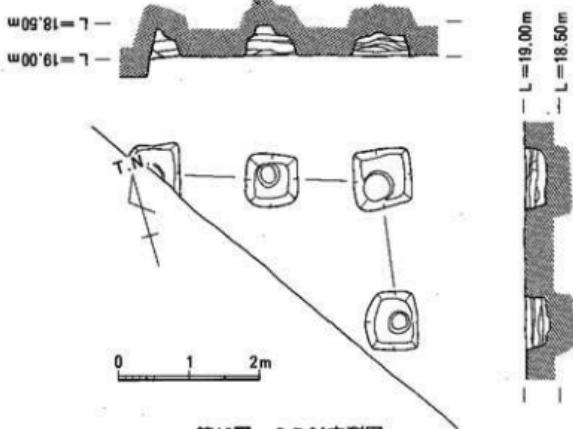
2、2区

削平がさほど及んでおらず遺構の保存状態が最も良好な調査区である。調査範囲が狭く水路等の工作物も近接しているため全容を把握した遺構は少ないが、掘立柱建物群とともに多くのピット群、土坑等を検出している。掘立柱建物は確実なものは1棟(SB04)のみであるが多数のピット群からみて本来はさらに数棟所在していたことは確実であろう。

①、SB04

調査区中央南辺付近で検出した掘立柱建物跡である。大半が調査区外に延びるため全容は把握できないが、南北1間、東西2間を検出している。ピットはいずれも2段の掘り方をもつが柱痕は確認されなかった。梁、桁の方位は不明であるが、東西の主柱穴間距離は1.6mで、南北が2mであることからみて、南北方向に主軸を持つ建物であろうと推定される。ピットの上段掘り方は一辺70~90cmの方形で、深さは30cm程度である。下段掘り方は径30cm前後で柱径を反映しているものと考えられる。上段掘り方の埋土は灰褐色粘質土あるいは暗黄灰色粘質土で、下段掘り方は暗灰褐色粘質土である。

出土遺物は須恵器、土師器の各細片のみであるが、埋土からみて8世紀を中心とする時期に位置付けられよう。



第10図 SB04実測図

②、SK01

調査区中央付近で検出した南北方向に長い椭円形土坑である。南北径2.2m、東西径1.05m、深さ8cm程度の皿状の断面形を持つ。埋土は灰褐色粘質土である。須恵器片、土師器片が少量出土している。第11図13は土師器皿の口縁部片である。端部内面に強いヨコナデによる凹面が

形成されている。内外面に赤色顔料が付着している。

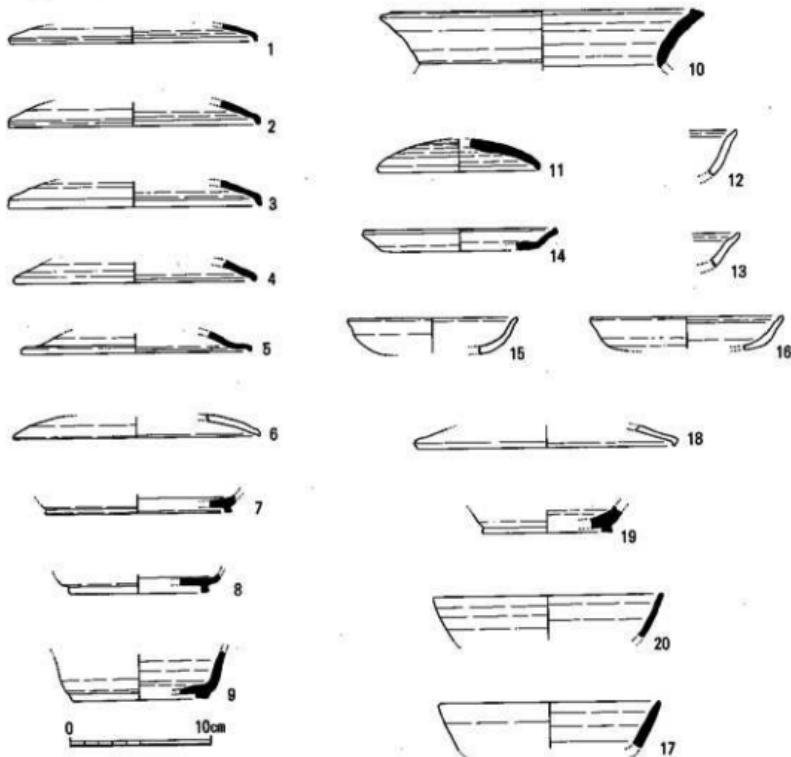
③、SK02

SK01を切って南側に掘り込まれた橢円形土坑で、南北1.7m、東西1.1m、深さ5~9cmを測る不整円形土坑である。須恵器、土師器片（第11図14、15）が出土している。14は須恵器皿で復元口径13.4cmの小型品である。15は土師器杯で口縁部を緩く外反させている。9世紀代に下る時期の所産であろう。

④、SK03

調査区中央で検出した南北方向に長い溝状の土坑である。南北長6.2m、東西幅1.2~1.5m、深さ3~14mを測る。中央付近が最も深く掘り込まれている。埋土は灰褐色粘質土で、炭化物を少量含む。東邊中央付近をSK21によって切られている。

遺物は比較的多く出土している。第11図1~12が図化可能なものである。1~5、11は須恵



第11図 2区出土土器実測図

器杯蓋である。1～5は口径17～18cm程度で口縁端部を内側に折り曲げる点で共通するが、5は天井部が緩くZ字状に屈曲している点が特徴的である。いずれも比較的高い天井部を持つものとみなしてよい。11は器壁が厚い小型品で口径11.2cmを測る。

6は回転台土師器で須恵器と同様の形態をもつ杯蓋である。口径17.2cmを測る。7～9は高台付杯身である。高台の底径、形状に差異がみられる。10は須恵器蓋の口縁部で口径21、4cmをはかる。端部を内側に屈曲させている。12は土師器皿で口縁端部を内側に折り曲げている。

全容の判明する遺物はないが、杯身、杯蓋の形状からみて8世紀前半を中心とする時期が考えられよう。ただ、5は若干後出するものと思われ、長期間にわたって機能していた土坑である可能性もある。

⑤、S D11

S K02の東側を起点とし北に延びたあと東方向へ緩く弧状を描きながら屈曲する幅50～70cm、深さ8～10cmを測る断面U字形の溝である。埋土は灰褐色粘質土で、多くのビット群に切られることから比較的早い段階に掘削されたものと考えられる。

第11図18、19が同溝出土土器である。18は回転台土師器で、口径18cmを測る。器形は8世紀前半期の須恵器に近似する。19は高台付の杯身あるいは蓋である。時期決定が困難であるが8世紀前半を中心とする時期に位置付けられるものと思われる。

⑥、S D12

調査区東壁中央やや北寄りの位置に東西方向に掘削された溝で、西端はS D11に届かない。幅は95cm前後で深さは最大で24cmを測る。断面はU字形を呈する。埋土は暗灰褐色粘質土で須恵器、土師器片が少量出土している。図化可能なものはないが8世紀を中心とする時期に掘削されたものと推定される。

⑦、S D13

1区と2区の境界にあたる現在の地境で検出した幅30～40cm、深さ10cm程度の溝である。西半部は近年のコンクリート擁壁構築により一部擾乱がみられ、東半部は地下げにより北半部を削平されているが、南半部の保存状態は良好であった。埋土は灰褐色粘質土で須恵器、土師器片が少量出土している。

この溝は方格地割が明瞭に残るこの地域にあって、現在の地境下に同一方向で検出した点が注目される。現在の地割の設定が奈良時代にまで遡る可能性が高いが、さらにこの東西溝は推定南海道より2町分南の位置にも相当するため、当地域の条里制施行自体が同時期にまで遡りうる可能性をも示唆しているものといえよう。

⑧、S P39

S D11とS D12の接点付近で検出した一辺約80cmの大型方形ビットである。埋土は暗灰褐色粘質土で、須恵器杯身（第11図20）が出土している。同ビットの南北約2mの位置には直列に

並ぶ同規模の大型方形ピットが所在しており本来これらが掘立柱建物を構成していたものと推定されるが、他辺への連結状況が不明であるためここでは単体の遺構として扱っておく。

⑨、S P 40

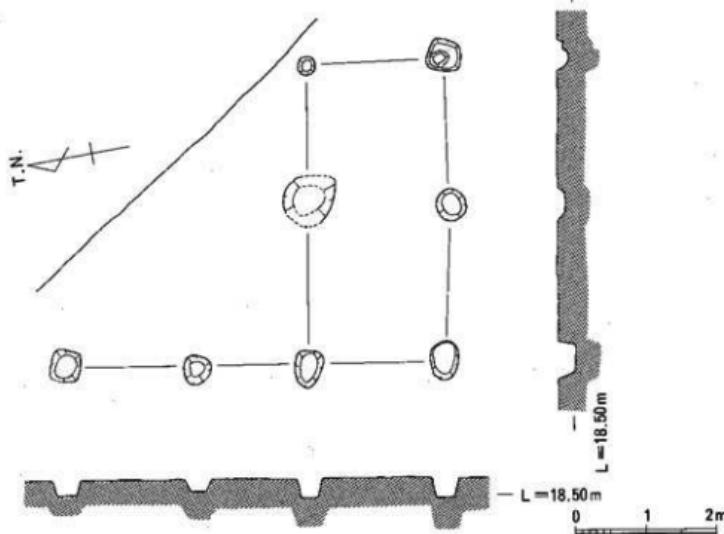
調査区東端中央付近で検出した径80cm以上を測る大型ピットである。埋土は暗灰褐色粘質土で須恵器杯身（第11図17）、土師器杯（同16）が出土している。

3、3区

西半部の削平が著しく浅い掘り方の遺構は消失しているものと推定されるが、削平を免れた東半部を中心に多数の掘立柱建物群、ピット群、土坑、溝等を検出している。掘立柱建物は確実なものとしては4棟（S B05～08）確認したのみであるが、本来はさらに数棟以上存在していた可能性が高い。

①、S B05

調査区北端中央付近で検出した掘立柱建物跡で、北東隅部が調査区外にあるため全容は把握できていない。南北3間、東西2間を確認している。南北方向に棟を持つ建物とみなしてよい



第12図 S B05実測図

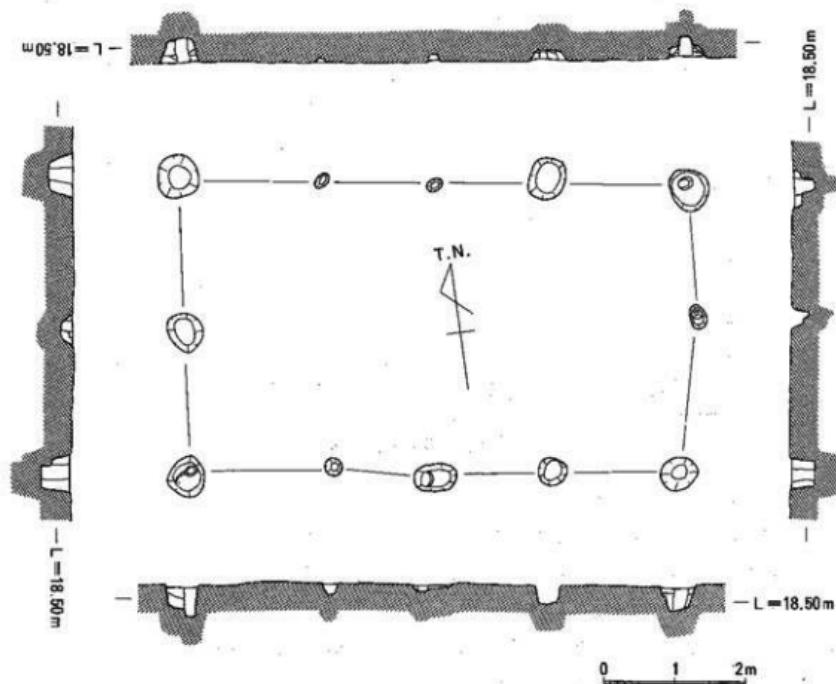
であろう。桁間は1.6~2m、梁間は2.1~2.2mの間に分布する。主軸方位はN10°Eである。

時期決定しうる遺物は出土していないが、各ピットの埋土が灰褐色粘質土であり、切り合ひ関係にあるものはいづれも先行するものであることから、集落の比較的早い段階で構築された建物であろうと推定される。

②、S B06

S B05に交錯する形で南側に構築された掘立柱建物跡で、ほぼ全容の判明する数少ないものである。東西4間、南北2間で、主軸方位はS 82°Eとほぼ東西方向である。建物隅部の主柱穴が径60cm前後、深さ40cm前後と大型の掘り方をもち、他は比較的小規模に設定されている。いづれのピットも柱痕を残しており、柱径は20cm前後と推定される。

各ピットの埋土は柱痕部分が暗灰褐色粘質土、裏込め部分が灰褐色粘質土あるいは暗黃灰色

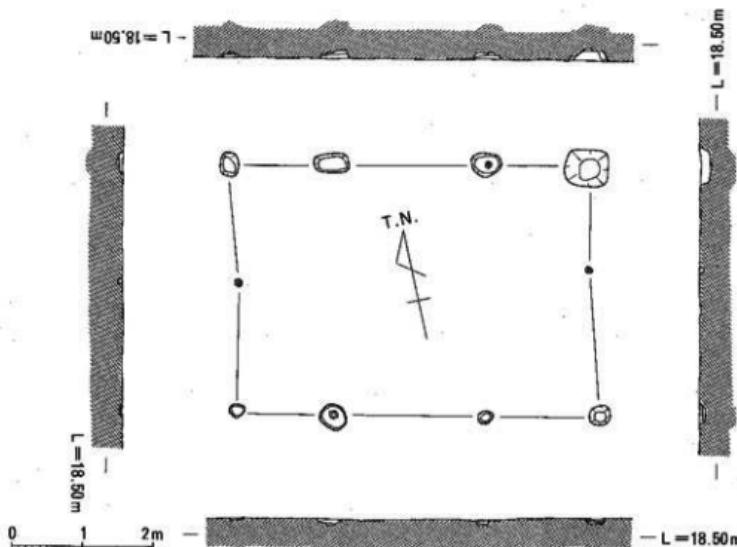


第13図 S B06実測図

粘質土である。P 9 から須恵器甕、土師器長胴甕（第16図15）、壺、杯等が出土している。詳細な時期決定は困難であるが、8世紀を中心とする時期に位置付けられる可能性が高い。

③、S B07

3-S区で検出した東西3間、南北2間の掘立柱建物跡である。桁間は中央が2.2mと広く、両側は1.4m程度と狭く設定されている。梁間は1.4m～2.1mとばらつきがみられる。建物全体の規模は東西5.1m、南北3.5mで、主軸方位はS 78° Eである。柱痕は残存していない。ピット埋土は上下2層に大別される。上層は暗灰褐色粘質土、下層は灰黑色粘質土で遺物はやはり須恵器細片が出土したのみであった。



第14図 S B07実測図

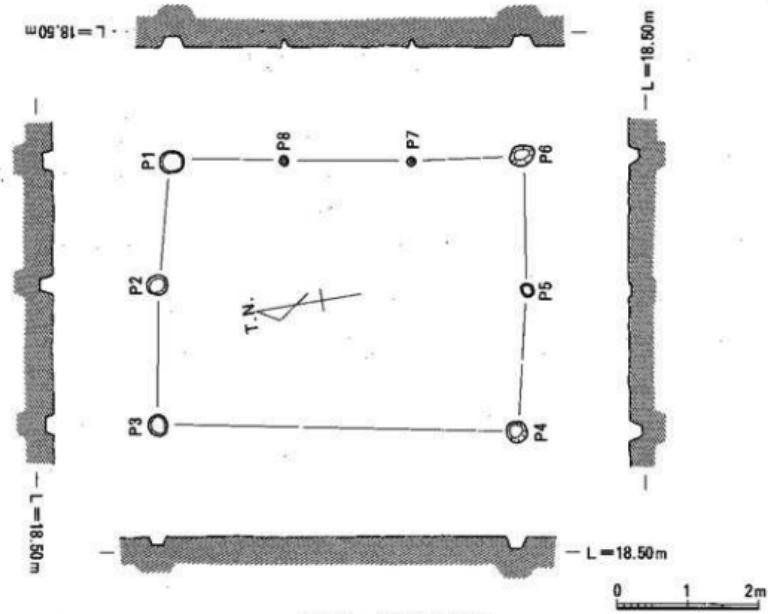
④、S B08

S B05の西隣に構築された南北3間、東西2間の掘立柱建物跡である。西辺部は削平により中央の2主柱穴を欠く。主軸方位はN 10° Eである。桁間は中央が1.8mと広く、その両側は1.6mである。梁間は1.8～2mの間に分布する。建物全体の規模は南北5m、東西3.8mである。

P 2より出土した須恵器杯身（第16図13）は口径17.6cm、器高2.8cmを計り、直線的に開く体部を持つ。9世紀代の所産とみなされる。

⑤、S K04

S B07の東隣に掘り込まれた南北2.6m、東西1mの不整椭円形土坑である。深さは3cm前



第15図 SB 08実測図

後と極めて浅いが、炭化物を含む灰黒色粘質土を埋土としており須恵器等の遺物が多量に出土している。

第16図1～4がSK04出土土器である。1は直口壺の蓋と推定される須恵器である。水平な天井部から鋭く折れ下に向って開く直線的な体部をもつ。口径15.6cm、体部高5.8cmを測る。宝珠つまみは扁平で中央が凹む。2は水平に長く開く口縁部をもつ土師器長胴甕で口径22.8cmをはかる。3は土師器碗で口縁端部をわずかに内側に折り曲げている。内面に上下2分割の暗文を施している。4は須恵器杯身で口径15.2cm、器高3.8cmを測る。高台は内傾し外側で接地する。詳細な時期決定が困難な資料であるが概ね8世紀前半に位置付けられるものと考えられる。

⑥ SK05

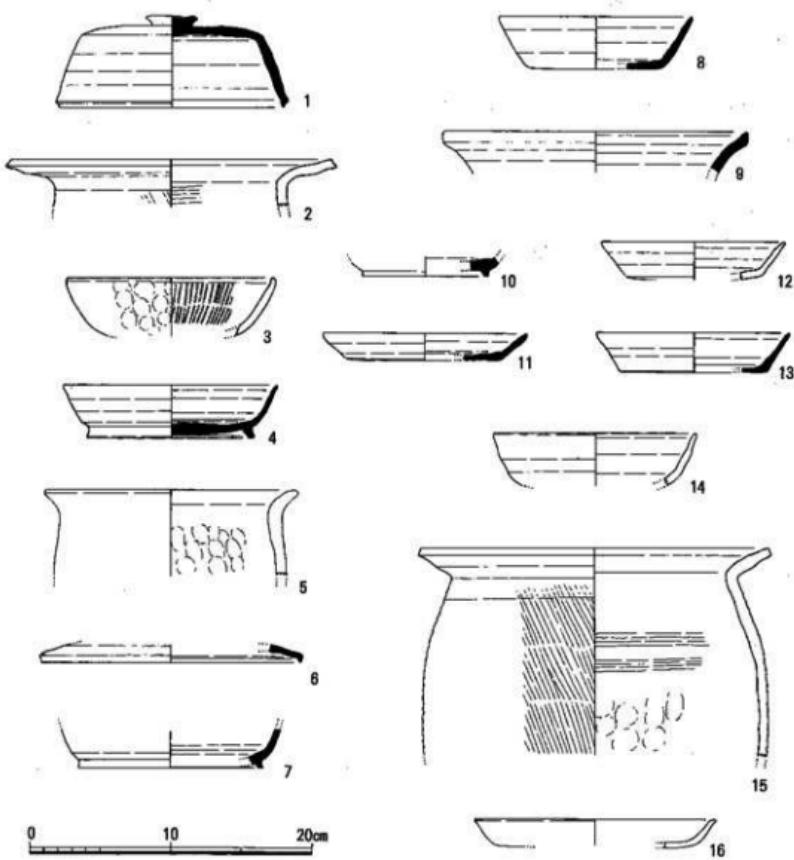
調査区北東隅部で検出した東西2.3m、南北1.6mの横円形土坑である。深さは10cm前後で底面は凹凸がみられる。埋土は埋土は灰褐色粘質土で須恵器、土師器片が少量出土している。

第16図5～7は同遺構出土土器である。5は長胴甕で緩く外反する短い口縁部をもつ。6は口径18.2cmを測る須恵器杯蓋である。口縁端部を内側に鋭く屈曲させている。7は高台付きの須恵器杯身で強くふんばり外側で接地する高台をもつ。杯類からみて8世紀前半を中心とする時期に位置付けられよう。

⑦、SD16

N区北東隅部付近で東西方向に走る小溝を5条検出した。SD16はそれらの北端に位置する溝で西半部は2条に分岐する。幅40cm前後で、東に向って次第に深くなり東端部で深さ10cmを測る。埋土は灰褐色粘質土で須恵器、土師器片が比較的多く出土している。

第16図8は須恵器杯身で口径13.4cm、器高3.7cmを測る。体部は直線的に外傾する。9は口径21、4cmを測る須恵器甕である。杯身の形状から8世紀後半から9世紀前半を中心とする時期の所産と推定される。



第16図 3区出土土器実測図

⑧、S D17

S D16の南に隣接して走る溝で東端付近で幅80cm、深さ10cmを測る。断面U字形を呈し底面は平坦である。埋土は灰褐色粘質土で須恵器片（第16図10、11）が少量出土している。10は高台付杯身で、内傾し外側で接地する高台をもつ。12は口径14、2cmと小型の皿である。両者に多少の時期差を認めるが溝の埋没期の下限は9世紀代に求めることができよう。

⑨、S D18

S K05を起点とし東方向に走る幅30～60cmの溝で、深さは東端付近で13cmを測る。底面は平坦ではなく凹凸が顕著である。直線的に開く体部を持つ須恵器杯身（12）が出土しており、9世紀代に位置付けられよう。

⑩、S P62

S B05とS B08間で検出した径40cm、深さ12cmを測るピットである。口径14、3cmを測る土師器碗（14）が出土している。

⑪、S P87

S K05を切って掘り込まれたピットである。径30cm、深さ24cmを測る。口径16、9cm、高さ2cmを測る土師器皿（16）が出土している。

第5章 まとめ

今回の発掘調査は短期間の小規模なものであったにもかかわらず予想以上の成果を挙げるものとなつた。残念ながら後世の削平が著しく時期等詳細な内容を把握した遺構は少ないが、これまで集落遺跡の所在が知られていなかった高松平野南部地域の開発過程を知るうえで重要な知見をもたらすことになった点が今回の調査の最大の成果と言えよう。調査期間、整理期間ともに極めて短期間であったため十分に遺跡の内容を検討・把握しきれていないが、現時点で判明する遺跡の概要を箇条書きにすると以下のとおりとなる。

- ①、西尾遺跡は8世紀前半に出現し、9世紀まで存続する古代前半の集落遺跡である。ただし、明確な遺構を検出していないため今回報告していないが、包含層中から弥生土器片及び瓦器片も出土しており本来複数の時期にまたがる遺跡である可能性が高い。
- ②、細かい集落の周期的な変遷は明確にしがたいが、今回の調査区内に限ってはおおまかな傾向としては8世紀代には大型の主柱穴をもつ掘立柱建物群が構築され、その後半期から9世紀に至ると小型の主柱穴をもつ建物へと変容しているものとみなされる。
- ③、1区と2区の境界で検出したSD13を境に遺構の密度、内容は大きく変容する。溝以北は掘立柱建物が分散して構築されているのみで遺構密度は低い。それに対し溝以南は大型主柱穴のものを含む多数の掘立柱建物群等の遺構を検出しておらず、遺構密度は極めて高い。集落の中心域は2区～3区にかけての範囲とみなしてよいであろう。また、SD13は主要な集落域の北限を画するものであった可能性も高い。
- ④、1～S区西端で検出した小溝群は同時期には1～3条程度機能していたものと推定されるが、本調査以前の試掘調査ではこの溝群の西側ではピット等の遺構は検出されておらず、集落域の西限を画するものであった可能性が高い。
- ⑤、今回検出した掘立柱建物跡、溝等はいざれも現在の地割方向にはほぼ一致するものがほとんどであり、極めて計画的に配置された遺構群と評価できる。SD13の項で述べたように現在の方格地割の起源が8世紀代にまで遡るものとみなしてよい。また、SD13は推定南海道からはほぼ2町南の位置に平行して走るものであり、南海道の位置比定が正しいとすれば西尾遺跡は広範囲かつ規格的な土地利用計画のもとに集落域を設定しているものとみなされる。集落域の外郭線を画あるいは分割する溝群ばかりでなく掘立柱建物群の主軸方位をもこの地割方向によって規定されている点も特徴的である。遺跡の出現が律令制度確立期であることを考えれば、地方行政組織あるいは地方支配制度の整備の一貫として進められた土地利用方式とみなしてよく、そこに巨大な政治権力の意志を読み取ることも可能であろう。

図 版



1-1 1、2区調査前の状況

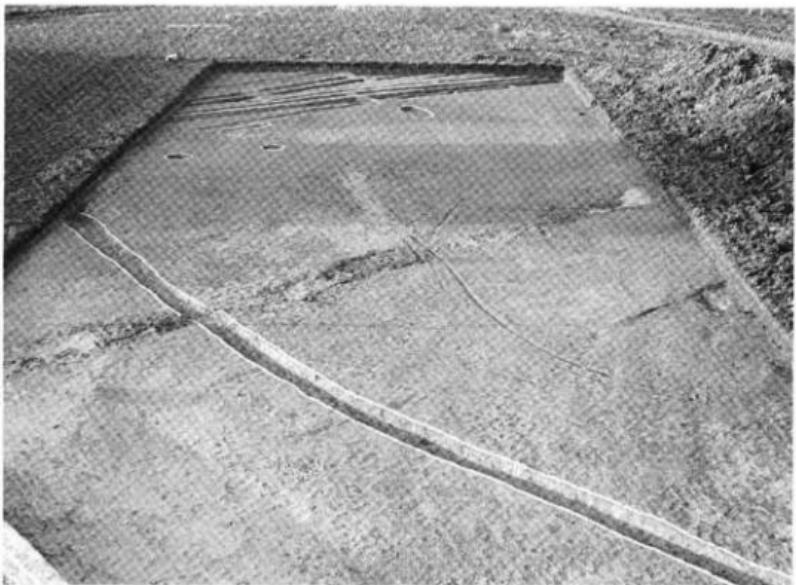


1-2 1-S区溝群検出状況

图版 2



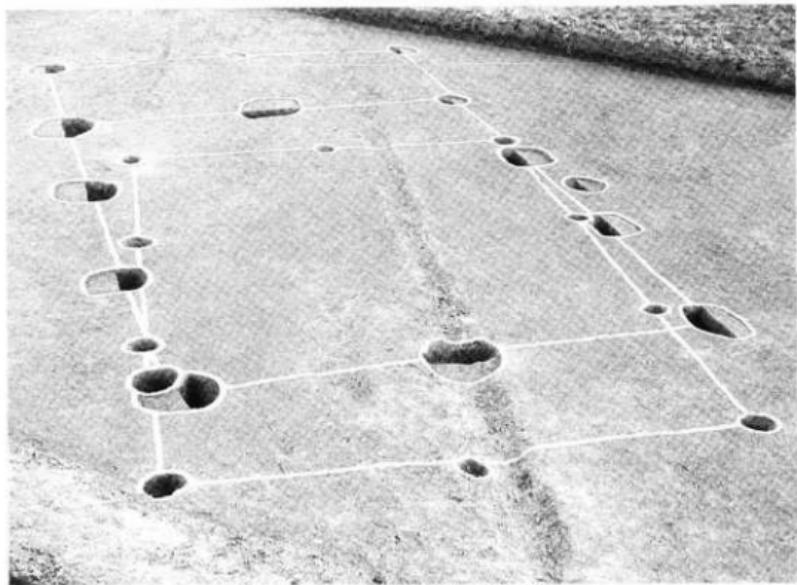
2-1 I-S区溝群完掘状况



2-2 I-S区全景



3-1 1-N区全景（東から）



3-2 SB01、02全景（南から）

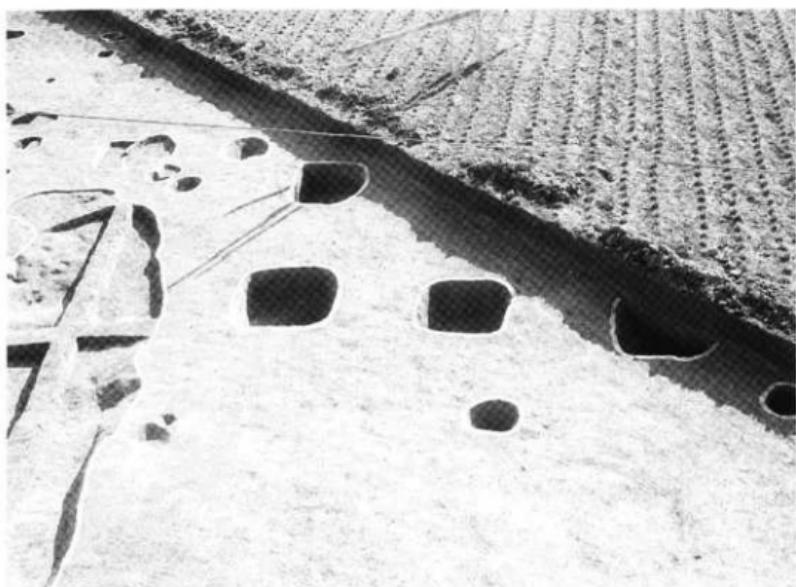
図版4



4-1 1-N区SB03



4-2 2区東半部全景



5-1 2区SB04



5-2 3区調査前の状況

图版 6



6-1 3区完掘状况全景



6-2 3区北東端部付近



7-1 SB05、06全景

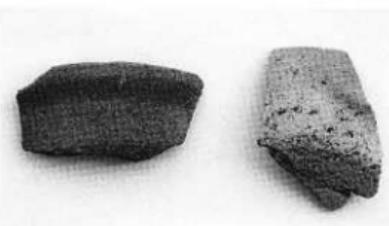


7-2 SB07全景（南から）

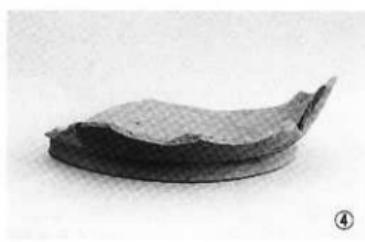
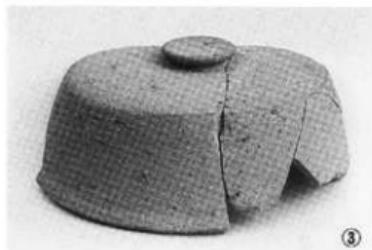
図版 8



SK 03 出土土器



SD 16 出土土器



③～⑤ SD 04出土土器

香川県埋蔵文化財発掘調査報告

—平成5年度 香川県上木部道路整備事業に伴う発掘調査報告集—

平成6年3月

編集 香川県教育委員会
香川県高松市番町2丁目1番1号
0878-31-1111(代)

発行 香川県埋蔵文化財研究会
印刷 (株)中央印刷所
香川県高松市成合町742-1
0878-85-3535